日本通訳翻訳学会
第 24 回年次大会

スケジュール
交通アクセスと会場案内
基調講演
予稿集

2023 年 9 月 2 日（土）－3 日（日）
会場　関西大学　千里山キャンパス

日本通訳翻訳学会 第 24 回年次大会スケジュール

開催日:2023 年 9 月 2 日(土)～3 日(日)

会場:関西大学 千里山キャンパス 第 3 学舎 3 号館・4 号館

第 1 日(9 月 2 日)

9:45	関大ソシオ AV 大ホール 入り口前(第 3 学舎 4 号館) 受付開始		
10:15 –10:25	関大ソシオ AV 大ホール(第 3 学舎 4 号館) 開会式		
	C301 **A 会場**	C302 **B 会場**	C303 **C 会場**
10:45 –11:15	A-1「中国の人気バラエティ番組『脱口秀大会(中国版 R-1 グランプリ)』の字幕翻訳ストラテジー研究:スコポス理論の立場からのアプローチ」 陳欣(武蔵野大学 D) (司会:篠原有子)	B-1「日本における現役のロシア語通訳者の継続的学習:実践コミュニティにおける協働学習及び個人学習を通じた熟達化」 ベリャコワ・エレーナ(立教大学 D) (司会:平塚ゆかり)	C-1 C-2「ドキュメンタリー作品『ナディアの誓い』の通訳翻訳学的分析:データセッションでの考察から」 飯田奈美子(立命館大学)、齊藤美野(順天堂大学)、坪井睦子(立教大学)、蓮池通子(フリーランス手話通訳士)、水野真木子(金城学院大学)、吉田理加(愛知県立大学)
11:25 –11:55	A-2 "Reception study of cultural references translations in subtitles: To identify the meaning-making process in audiovisual products" Cheng Sirui (Sophia University D) (司会:篠原有子)	B-2「大学の通訳教育における講義科目の意義と課題についての考察」 西畑香里(東京外国語大学) (司会:平塚ゆかり)	
11:55 –13:00	昼食・休憩	C302 院生コロキウム 院生有志による自主セッション (司会:澤田晶子)	C403 評議員会
	C301 **A 会場**	C302 **B 会場**	C303 **C 会場**
13:00 –13:30	A-3「『折りたたみ北京』の日本語訳のスタイルについて:中日直訳本と英日重訳本の定量的分析をもとに」 盧冬麗(北陸大学・南京農業大学)、劉雪琴(南京農業大学)、程星博(南京農業大学 M) (司会:辛島デイヴィッド)	B-3	C-3「日本におけるラグビー通訳者の就業実態調査」 松見誌野(名古屋外国語大学) (司会:稲生衣代)
13:40 –14:10	A-4「村上春樹作品におけるインドネシア語翻訳プロセス:比喩表現を中心に」 岡田莉子(東京外国語大学 D) (司会:辛島デイヴィッド)	B-4「ウクライナ避難民支援での自治体の言語対応:音声翻訳プログラムの使用を中心に 武田珂代子(立教大学) (司会:長沼美香子)	C-4「通訳者の使い分けから見るクライアントの通訳者に対する期待」 木村護郎クリストフ(上智大学)、高橋絹子(関西大学) (司会:稲生衣代)
14:20 –14:50	A-5「日本語の文字種の操作による表現の翻訳:村上春樹(著)『海辺のカフカ』ナカタさんの話し言葉をケーススタディとして」 山木戸浩子(藤女子大学) (司会:辛島デイヴィッド)	B-5「無料匿名性感染症検査会 iTesting@Nagoya における多言語アウトリーチ実践報告:「プリエディット(前編集)」の工程に着目して」 吉田理加(愛知県立大学)、今橋真弓(名古屋医療センター)、金子典代(名古屋市立大学) (司会:長沼美香子)	C-5「外交使節団に所属する通訳者の役割意識:日西通訳を介した記者会見を事例に」 吉川祥子(日西通訳者) (司会:稲生衣代)
15:10	関大ソシオ AV 大ホール(第 3 学舎 4 号館) **総会**		

–15:50	
16:00 –17:30	関大ソシオ AV 大ホール(第 3 学舎 4 号館) **基調講演** 「そこに動機はあるんか？—外国語教育と動機づけの関係」 竹内理(関西大学外国語学部・大学院外国語教育学研究科教授) (司会:高橋絹子)
18:00 –20:00	チルコロ(関西大学キャンパス内) **懇親会** ※懇親会会費 一般 4,400 円(当日参加申し込み不可)

第 2 日(9 月 3 日)

	C301 **A 会場**	C302 **B 会場**	C303 **C 会場**
10:00 –10:30	A-6「「日本におけるトランスレーションポリシー」プロジェクトの活動報告」 武田珂代子(立教大学)、辛島デイヴィッド(早稲田大学)、宮田玲(東京大学)、島津美和子(立教大学)、吉田理加(愛知県立大学) (司会:飯田奈美子)	B-6「日本語の話法の翻訳方略:『伊豆の踊子』の英語翻訳を事例に」 佐川寛知(神戸大学 D) (司会:大久保友博)	C-6「性教育絵本の英日翻訳の事例研究: Making a Baby と『ようこそ！ 赤ちゃん』の比較分析から」 古川弘子(東北学院大学) (司会:齊藤美野)
10:40 –11:10	A-7「最近の通訳現場の状況に関する報告:オンライン通訳と AI」 高橋絹子(関西大学) (司会:飯田奈美子)	B-7 "The effect of networks on women's language in Japanese comics translations: A case study of X-Men's *Dark Phoenix Saga*" Maurice Alesch (Kyoto University D) (司会:大久保友博)	C-7「文化翻訳としての「重訳」の再考:絵本作家「長谷川義史」の翻訳作品」 尹惠貞(一橋大学) (司会:齊藤美野)
11:20 –11:50	A-8「翻訳者の現場離れは防げるか:翻訳者の労働生活の質とモチベーションを測定する心理尺度の開発」 阪本章子(関西大学) (司会:飯田奈美子)	B-8「メタ言語としての英日翻訳方略体系の洗練と検証」 山本真佑花(東京大学)、藤田篤(情報通信研究機構)、影浦峡(東京大学) (司会:大久保友博)	C-8「魯迅日本留学期における翻訳規範の形成:計量的考証をもとに」 陳暁淇(関西大学 D) (司会:齊藤美野)
11:50 –13:35	昼食・休憩 **C402** ポスター発表 **P-1**「PAC 分析に基づいた通訳学習者の通訳実践に対する不安要因研究」 脇田彩代(北京語言大学 M) **P-2**「Average Token Delay: 同時通訳の遅延評価尺度」 加納保昌(奈良先端科学技術大学院大学 D)、須藤克仁(奈良先端科学技術大学院大学)、中村哲(奈良先端科学技術大学院大学) **P-3**「文学翻訳における AI の活用:多言語比較による翻訳再現の探求」 NGUYEN Thanh Tam(神戸大学)		C403 理事会
	C301 **A 会場**	C302 **B 会場**	C303 **C 会場**
13:45	A-9「テキスト理解モデルを援用した翻訳指導実践:学習者の翻訳と村上春樹による翻訳の比較分析に焦点をあてて」 辰己明子(長崎外国語大学) (司会:石原知英)	B-9「医療通訳者の職務満足感への影響因子の検討」 中村明音(順天堂大学 M)、姜暁霞(順天堂大学 M)、仙令羽(順天堂大学 M)、李鑫(順天堂大学 M)、徐磊(順天堂大学 M)、野田愛(順天堂大	C-9「中国における"通事"の役割考察:長崎唐通事との比較から」 平塚ゆかり(北京語言大学・順天堂大学) (司会:藤濤文子)

–14:15		学)、ニヨンサバ・フランソワ(順天堂大学)、大野直子(順天堂大学) (司会:吉田理加)	
14:25 –14:55	A-10「ディクテーションが聴解と訳出に与える影響について」 楊潔氷(河南理工大学) (司会:石原知英)	B-10「日本の司法通訳採用認定制度への提言:言語運用能力、倫理、行動規範を包括して」 毛利雅子(名古屋市立大学) (司会:吉田理加)	C-10「歴史文書における厚い翻訳:占領期「都道府県軍政部月例活動報告書」の事例」 澤田晶子(神戸市外国語大学 M) (司会:藤濤文子)
15:05 –15:35	A-11「知識を媒介とする翻訳教育教授法の検討:起点言語文書要素メタ言語を例として」 朴惠(東京大学)、山本真佑花(東京大学)、影浦峡(東京大学)、藤田篤(情報通信研究機構) (司会:石原知英)	B-11「通訳を介した子どもの司法面接における課題」 水野真木子(金城学院大学)、Umidahon Ashurova(金城学院大学)、佐藤道(金城学院大学) (司会:吉田理加)	

- 研究発表は、発表 20 分＋質疑応答 10 分です。質問は発表内容に直接関連したことについてのみ、手短に行うものとします。質問者の単なる意見の陳述はご遠慮ください。
- 各発表間の 10 分間は、出入室のための時間です。移動はすみやかにお願いします。
- 研究発表・講演の撮影・録画・録音は、発表者・講演者の許可を得ている場合を除き、ご遠慮ください。
- 発表者の記載にある M および D は、それぞれ発表者が博士前期課程(修士課程)、博士後期課程の学生会員であることを示します。
- C402はポスター発表会場として使用するほか、休憩室としてもご利用いただけます。お昼時など自由にご利用ください。
- C401では、出版社による書籍展示・販売を行っています。

参加者の皆様へ:

- 年次大会・総会への参加登録は、以下の URL・QR コードの申し込みフォーム(Google フォーム)で行ってください。(返信用ハガキでの出欠確認はいたしません。)学会ウェブサイトにもリンクがあります。また、学会員の皆様にはメーリングリストでもお知らせします。

  ・年次大会・総会申し込みフォーム: https://forms.gle/pQY7g5fZj7mp4ZgY6

  ・日本通訳翻訳学会ウェブサイト: https://jaits.jp/

- 参加登録の締め切りは、8 月 31 日(木)です(ただし、懇親会ご参加の場合は 8 月 20 日(日)まで)。(手話通訳をご希望される方は、準備の関係上、8 月 10 日(木)までにご登録ください。)

発表者の皆様へ:

- 研究発表で使用する教室には、プロジェクタに接続された PC が用意されています。USB メモリ等でデータをご持参ください。インターネット経由でのデータ移行は、スムースに行かない可能性がありますのでお勧めしません。機材をご自身で持ちこんでいただくこともできますが、その際には、必要となるケーブルのご準備も併せてお願いします。いずれの場合も、発表開始までに余裕をもって、データ移行などをお済ませください。
- 資料を配布いただくことも可能です。配布なさる場合は、ご自身で必要部数(40 部程度)をご準備いただき、当日ご持参ください。教室での配布については、必要に応じて会場スタッフがお手伝いをいたします。
- ポスター発表で掲出するポスターは、各自で印刷したものを当日ご持参ください。掲示スペースは、ホワイトボードもしくは教室の壁で、いずれも 縦 1150mm × 横 2940mm 以上のスペースです。コアタイム(ポスター発表会場に発表者が必ずいる時間)は2日目の 11:50-13:35 です。ポスターは、1日目の午前から掲示していただけます。
- 発表の内容に関して、個人情報や守秘義務、二重投稿/二重発表、無断引用などには十分ご留意ください。

懇親会の参加申し込みについて:

- 懇親会にご参加の方は、8 月 20 日(日)までに、上記の年次大会申し込みフォームを通じて、懇親会の参加申し込みもしてください。当日の受付はいたしません。
- 懇親会費は、事前にお知らせする支払いシステムを通じてお支払いください。

[第 24 回年次大会実行委員会]
高橋絹子(委員長)、伊原紀子、阪本章子、田村颯登、細川真菜、南津佳広

[大会プログラム担当理事]
齊藤美野

交通アクセス

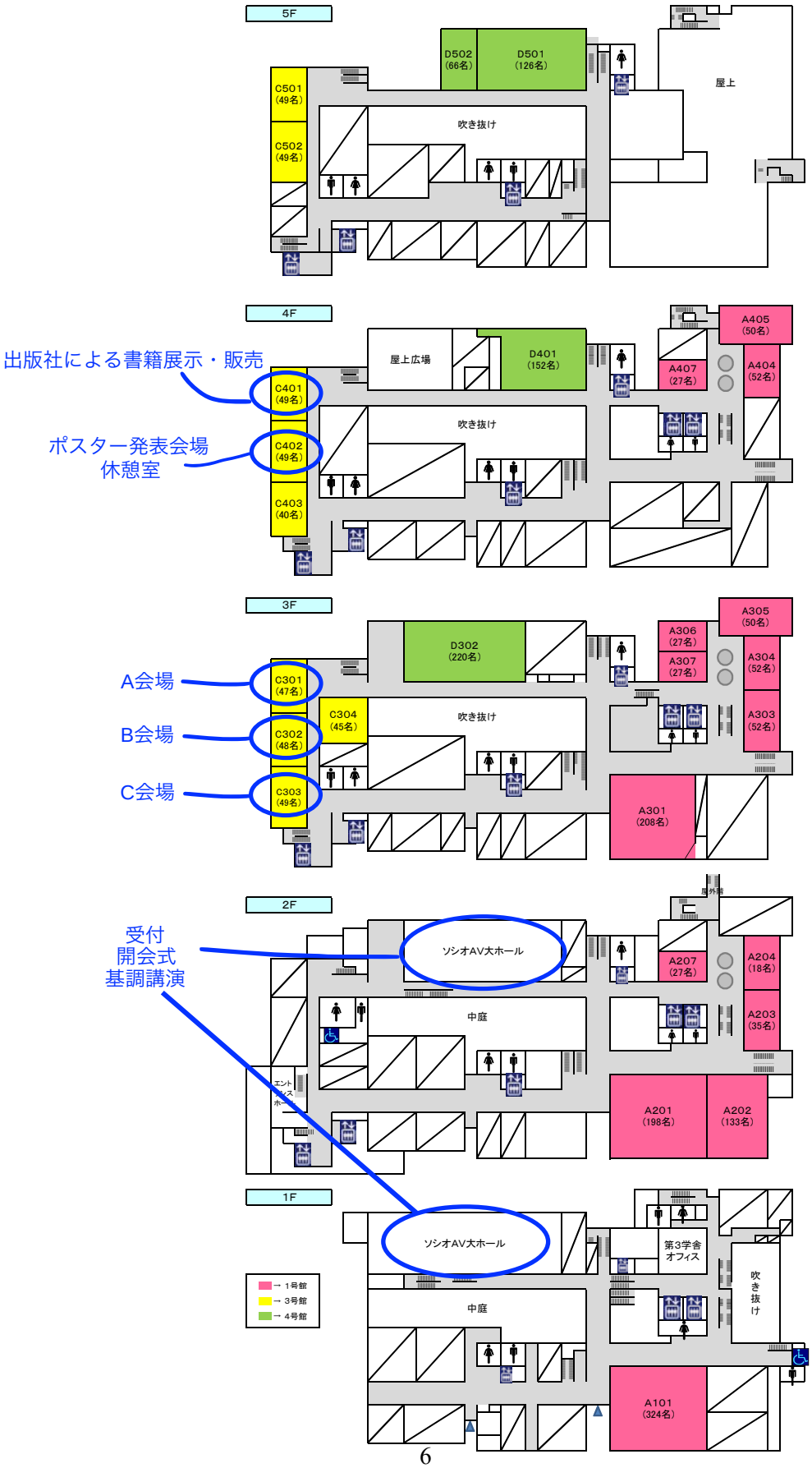
会場：関西大学 千里山キャンパス

関西大学 千里山キャンパス
（大阪府吹田市山手町３丁目３番３５号）
会場は千里山キャンパスの第３学舎３号館（C 棟）で、地図中の 3-C の建物です。
総会・基調講演は、第３学舎４号館（D 棟）の「関大ソシオ AV 大ホール」です（地図中 3-D）。
懇親会は、キャンパス内のレストラン「チルコロ」で開催します（地図中 18）。

詳しい地図はこちら
https://www.kansai-u.ac.jp/ja/about/campus/

○阪急電鉄「関大前」駅下車（北千里行き乗車の場合、進行方向の前方で下車、前の階段利用）。
関大前駅北口から出て、西門からお入りください。

関西大学（第３学舎） 教室配置図



第1日（9 月 2 日）　関大ソシオ AV 大ホール（第3学舎4号館）16:00 – 17:30

基調講演

「そこに動機はあるんか？—外国語教育と動機づけの関係」

竹内理
（関西大学外国語学部・大学院外国語教育学研究科教授）

要旨

外国語学習の成否に大きな影響を及ぼす学習者要因には、様々なもの（たとえば学習方略、学習不安、言語適性など）が考えられます。その中でも、もっとも大きな影響を与えるとされるのが動機づけ(Motivation)です。本講演では、まず、動機や動機づけのメカニズム、動機づけ方略の役割などを、理論と実証データから概説していきます。その後、これまでの知見にもとづき、外国語の教育場面に応用ができる 10 個の具体的な方策やアイディアを提言し、皆さんと共有していきたいと考えています。また、時間が許せば、理論面での最近の展開、たとえばポジティブ心理学との関わり（フロー理論、拡大・構築理論など）や自己効力感（Self-efficacy）、そしてエンゲージメント（Engagement）の枠組みなどについても、本講演の中で言及していきたいと思います。なんだか小難しそうな講演だな、眠たそうだな、などとお考えにならず、どうぞ気楽にご参加ください。決して眠れません。

プロフィール

英語教育学（教員養成、教科教育法）
応用言語学（動機づけ、学習方略、学習者要因）
教育メディア論（映像、機械翻訳等の教育への利用）

神戸市外国語大学大学院（英語学）修了後、同志社女子大学研究助手、助教授、関西大学総合情報学部助教授などを経て現職。助手時代にフルブライト奨学金を受けて米国へ留学。
モントレー国際大学院（現、ミドルベリー国際大学院モントレー校）を首席で修了（TESOL）。兵庫教育大学連合大学院より、外国語学習成功者の研究で博士号（学校教育学）を取得。
外国語教育メディア学会（LET）会長（3 期）、関西大学外国語学部・学部長（6 期）、大学院外国語教育学研究科科長（7 期）、学校法人関西大学理事（3 期）、中央教育審議会専門委員、文科省各種委員会委員、大阪府教育委員、京都府参与などを歴任。国際研究誌 *System* (Elsevier), *Asian Journal of Applied Linguistics* (Chinese Univ. Press) 等の編集委員や *Language Learning, TESOL Quarterly, the Modern Language Journal*（いずれも Wiley)等の査読委員、小中高の検定教科書（*New Crown, Crown Jr., LANDMARK*）の編集委員長・編集委員も務める。

司会
高橋絹子（関西大学）

第1日(9 月 2 日) A 会場(C301) 10:45 – 11:15

A-1 司会: 篠原有子

中国の人気バラエティ番組『脱ロ秀大会(中国版 R-1 グランプリ)』の字幕翻訳ストラテジー研究:スコポス理論の立場からのアプローチ

陳 欣(武蔵野大学 D)

翻訳研究は長い歴史を経てきたが、藤濤(2007)では、原文志向から訳文志向へと変化し、また翻訳のとらえ方が異文化間コミュニケーションへとシフトしたと指摘している。映像と音声が伴う映画やドラマ、ゲーム等は、異文化に触れる手軽な方法の一つであるが、その際、字幕という視聴覚翻訳(Audiovisual Translation/AVT)が視聴者の理解にとって重要な役割を果たす。字幕翻訳は、表示できる最大字数、表示できる時間等の制限があるため、通常の文書翻訳とは異なり、文書翻訳の理論をそのまま当てはめることはできない。

中国では 2011 年以降、Blibli、IQIYI(爱奇艺)やテンセントビデオ(腾讯视频)などのような動画配信会社が日本の権利者からドラマ・テレビ番組・アニメのライセンスを購入し、動画配信サイトで配信し始めた。また近年日本でも、『こんにちは、私のお母さん(你好,李焕英)』(2022)『小さき麦の花(隠入尘烟)』(2023)のように中国映画が映画館で上映され、中国のドラマが動画配信サイトで配信され、テレビでも放送されるようになった。

前述の背景の中で、本研究がバラエティ番組に着目した理由は、これまで映画、ドラマ、アニメなどの字幕研究がなされているが、バラエティ番組はまだ翻訳研究対象として検証がなされていないためである。また、バラエティ番組の中でも「お笑い」番組を研究対象に選んだ理由は、「笑いを誘う要素[1]」をいかに起点言語から目標言語に等価的に訳出するか、そのストラテジーを考察するためである。

菅野(2011)では、異文化理解において、外国語学習者にとっては外国語の言語的知識、文化的知識が不十分であるために、当該言語圏の「笑い」を鑑賞するのは簡単ではないと指摘している。それにより、本研究の理論的枠組みは、翻訳の目的に重点を置く、機能主義翻訳理論の核心であるスコポス理論を用いる。

本研究の研究方法として、具体的には中国の人気バラエティ番組『脱ロ秀大会(2017 年～2022 年)』を取り上げ、計5シーズンを中心に、決勝戦における第1位～第3位の出演者のスクリプトに限定して、まず日本語訳を試みる。次に、どのようなストラテジーで翻訳するとより忠実に起点言語の「笑いを誘う要素」を目標言語に表現できるのかを検証する。

本発表では、『脱ロ秀大会』計 5 シーズンの決勝戦スクリプトを用いて、翻訳をする際に使われるストラテジーを検証すると同時に、中国語ネイティブによる訳出と、日本語ネイティブによる訳出の比較を行い、中国語の「笑いを誘う要素」を日本語に翻訳する際の有効的な手法を明らかにすることを目指す。

【参考文献】

貢 希真. (2019). 機能主義による日中間の字幕翻訳についての研究―忠実度を中心に―

藤濤文子. (2016). 視聴覚翻訳における非言語要素の役割: 機能主義的翻訳研究の立場から [抄録](立教大学異文化コミュニケーション研究科 2014 年度第 3 回公開講演会 (2014 年 12 月 13 日)). 異文化コミュニケーション論集, 14, 7-17.

【注】

[1]「ユーモア」または「ネタ」という言葉は日本語、中国語それぞれ意味が異なるため、あえて「笑いを誘う要素」と表現している。

第1日(9 月 2 日） A 会場(C301） 11:25 – 11:55
A-2 司会：篠原有子

Reception study of cultural references translations in subtitles: To identify the meaning-making process in audiovisual products

Cheng Sirui (Sophia University D)

In audiovisual products, the semiotic complexity of texts causes many difficulties in translation. In audiovisual translation studies (AVT), instead of only stressing the multimodal nature of audiovisual texts, it is vital to identify different roles of each mode and the meaning-making parts. Since audiences of a subtitled product (like a foreign film) not only gain information from subtitles, but from the combination and interaction of various modes. Subtitles can also be considered as one of the modes in the product, since they have the potential to "preserve, cancel or modify" the intermodal relations (Ramos Pinto & Mubaraki, 2020). The role of subtitles can change due to the translation strategy adapted in translating. Previous studies have shown some interesting results on this topic, such as Alfaify and Ramos Pinto (2022) who have examined the impact of domesticating and foreignizing methods on Saudi Arabia viewers, found out that both strategies are deficient to fully re-create the cultural references (CRs) in target language. And Lång (2016) who notices that the combination of subtitle and narration have a beneficial effect on the information acquisition for audience. But the discussion of the relation between different strategies of subtitle and other modes has not been well illustrated, thus further research on identifying the relation between subtitle and other modes is needed.

To identify the roles played by different modes and the intermodal relation, reception study is believed to be effective in analyzing the meaning-making process from the perspective of viewers. However, the previous reception studies are mainly conducted within European countries, data from Asia is needed in this topic since there are more linguistic differences between English and Japanese/Chinese than European languages.

In this reception study, a questionnaire is designed to exam different roles of each mode and the interrelation between modes with a focus on the different strategies used in translating CRs in Japanese subtitle of English films. The focus of this study is the translation strategy used for CRs. Different strategies adapted in translation could result in different roles played by subtitles, and have the different effects on the intermodal relations. The purpose of this study is to identify the meaning-making process in the audiovisual product with subtitles, as well as to identify audience's attitudes towards the subtitle. The result would help to identify the meaning-making process from the perspective of audience and help to revise the multimodal analysis method.

Alfaify, Abeer, and Sara Ramos Pinto. "Cultural references in films: An audience reception study of subtitling into Arabic." *The Translator* 28.1 (2022): 112-131.

Lång, Juha. "Subtitles vs. narration: The acquisition of information from visual-verbal and audio-verbal channels when watching a television documentary." *Eyetracking and applied linguistics* 2 (2016): 59-81.

Ramos Pinto, Sara, and Aishah Mubaraki. "Multimodal corpus analysis of subtitling: The case of non-standard varieties." *Target. International Journal of Translation Studies* 32.3 (2020): 389-419.

第1日(9 月 2 日) A 会場(C301) 13:00 – 13:30

A-3 司会: 辛島デイヴィッド

『折りたたみ北京』の日本語訳のスタイルについて:中日直訳本と英日重訳本の定量的分析をもとに

盧 冬麗(北陸大学・南京農業大学)、劉 雪琴(南京農業大学)、程 星博(南京農業大学 M)

中国当代SF 文学は、海外で中国の物語を伝えるだけでなく、中国のイメージを形作る代表的なものとなっており、世界文学の共通性と民族性を示している。本稿は、郝景芳の『折りたたみ北京』の英日重訳本と中日直訳本を研究対象とし、多言語平行コーパスを作成することで、語彙、文法、物語の 3 つの面から両訳本の翻訳スタイルを比較した。語彙の豊富さ、頻出単語、ECR の分析を通して、直訳本は原作の言語的特色が保たれていることにより中国 SF の異質性や新鮮さを日本の読者に伝えようとしているのに対して、重訳本は英訳の影響を受けており、特に英語圏の読者の文学的審美に基いているため、解釈法でより簡潔かつわかりやすい訳文にするといったスタイルの相違があることが明らかとなった。文法面では、平均文長、文と文節の長さにおける分布の分析を通して、直訳本は原作の長文スタイルを引き継き、内容の一貫性と叙述の完全性を重んじているのに対して、重訳本は短文の多用により、SF 文学のリズム感と躍動感を作り上げ、読者が臨場感を味えるようにしていることが明らかとなった。また、物語において、直訳本が原作の間接話法を多用することで傍観者の視点から物語を述べるのに対し、重訳本は直接話法に変更され、物語の現場に引き寄せる効果を作り上げることが分かった。世界 SF 文学の美意識を際立たせる重訳本と中国 SF 文学の異質性を際立たせる直訳本は、日本の中国 SF 文学の翻訳チャネルにおける多様化を示している。英日重訳本と中日直訳本はそれぞれ中国 SF 文学を翻訳及び紹介するグローバルでオープンなコミュニティを形成し、海外において中国 SF の物語を伝えているのである。

【参考文献】

[1] Baker, M. Towards a methodology for investigating the style of a literary translator[J]. Target, 2000(02): 34-36.
[2] 刘雪琴.計量文体学から辿る文体の変化, テキストアナリティクス(第 7 巻)[M]. 金明哲, 中村靖子(編), 東京:岩波書庫, 2021.
[3] 陈甜. 《北京折叠》英译本中空间叙事特征的再现[D]. 西南大学, 2019.
[4] 胡开宝, 谢丽欣. 基于语料库的译者风格研究:内涵与路径[J]. 中国翻译, 2017(02): 12-18.
[5] 梁悦, 孙会军. 刘宇昆的翻译思想研究——以《北京折叠》的英译本为例[J]. 翻译论坛, 2018(01): 54-58.
[6] 卢冬丽. 《三体》系列在日本的复合性译介生成[J]. 外语教学与研究, 2022(05): 783-792.
[7] 申丹. 小说中人物话语的不同表达方式[J]. 外语教学与研究, 1991(01): 13-18.
[8] 宋明炜, 汪晓慧. 在“世界”中的中国科幻小说——科幻作为一种全球文类, 及其成为世界文学的可能与问题[J]. 中国比较文学, 2022(02):81-100.
[9] 王秋艳, 宋学智. 基于语料库的傅译《欧也妮・葛朗台》风格研究[J]. 外国语文, 2020, 36(03): 97-103.
[10] 王淑卿. 科幻小说汉译英翻译策略研究[D].北京外国语大学, 2018.
[11] 许钧. 深耕文学翻译 增进文化交流(创造性转化创新性发展纵横谈)[N]. 人民日报, 2021 年 4 月 13 日.

第1日(9 月 2 日) A 会場(C301) 13:40 – 14:10

A-4 司会: 辛島デイヴィッド

村上春樹作品におけるインドネシア語翻訳プロセス:比喩表現を中心に

岡田 莉子(東京外国語大学 D)

本発表は、翻訳者に着目し、翻訳プロセスを分析することによって、テクストに反映される彼らの意識や価値観とはどのようなものか明らかにするものである。

先行研究において、翻訳に伴う暴力性や戦略性が論じられ、翻訳が単なる言語変換ではなく文化越境行為であると認識し再考する必要性が唱えられてきた。しかし、起点テクスト(Source Text; ST)と目標テクスト(Target Text; TT)のある特定の側面を比較した研究が多いのに比べ、その中間に位置する、つまり文化越境行為を実行する翻訳者に関する研究は少ない。

そこで、翻訳者に着目し、TT に反映される彼らの意識や価値観を ST 解釈から TT 産出までのプロセスを分析することによって明らかにしていく。

分析の対象として、解釈及び訳出の際に処理労力を要すると考えられる表現の比喩表現を設定する。翻訳の根底問題として、ST の概念や言葉が TT の文化に直接当てはまらない場合、ST を字義通り訳出すれば、ST について知識を持たない読者にとって理解困難なものとなり、文化的等価性は失われる。また、ST の意味内容を訳出すると ST に忠実でない訳となることがしばしば挙げられる。比喩表現には、この問題が浮き彫りになる可能性が大いにあると推測される。

対象作品として、比喩表現が多用され、作家独特と思しき比喩表現と日本語特有の比喩表現とが混在する村上春樹の『ノルウェイの森』、『風の歌を聴け』、『1Q84』の日本語原典とインドネシア語訳を設定する。

ST、すなわち日本語と TT、すなわちインドネシア語を対応させパラレルコーパス形式のデータベースを作成し、そこから、対象とする表現の「ように」、「ような」、「みたいに」、「みたいな」の用例をすべて抽出する。前田(2006)及び陸路・川木(2000)に従い意味・機能別に分類し、比喩表現の用例のみを抽出する。

取集した比喩表現のデータは、関連性理論(Sperber & Wilson, 1986/1995=1999)及びそれを応用した翻訳理論(Gutt, 1991/ 2004, 2014)、そして、発表者が独自に行なった翻訳者へのインタビューに基づき分析する。

本発表では、分析の結果得られた TT に反映される翻訳者の意識や価値観について論じるとともに、インドネシア語翻訳における翻訳者の課題について報告する。

【参考文献】

Gutt, E. (1991/2004) *Translation as interlingual interpretive use*, in L. Venuti (ed.) (2004), pp. 376-396.

——— (2014) *Translation and Relevance: Cognition and Context* (2nd Edition). Taylor and Francis.

Sperber, D. & Wilson, D. (1986/1995) *Relevance: Communication and cognition*. London. Wiley-Blackwell, 2nd edition.

Venuti, L. (ed.) (2004) *The Translation Studies Reader*, London and New York. Routledge, 2nd edition.

スペルベル, D & ウイルソン, D.(1999)内田聖二・中達敏明・宋南先・田中圭子訳『関連性理論 : 伝達と認知 第2版』東京:研究社出版.

前田直子(2006)『「ように」の意味・用法』東京:笠間書院.

陸路美礼・川木冴子(2000)「『ように』の基本的な意味―様態用法を中心として―」『東海大学紀要留学生教育センター』第 20 号:17-26.

第1日(9 **月** 2 **日**) A **会場**(C301) 14:20 – 14:50

A-5 **司会**: **辛島デイヴィッド**

日本語の文字種の操作による表現の翻訳:村上春樹(著)『海辺のカフカ』ナカタさんの話し言葉をケーススタディとして

山木戸 浩子(藤女子大学)

日本語には漢字・ひらがな・カタカナの 3 つの文字種が存在し、平均的な大人の文章はこれらがまじった「漢字仮名まじり」で書かれるのが典型である。漢字は表語(表意)文字、仮名は表音文字であり、名詞、動詞・形容詞(語幹)等の内容語には漢字、助詞等の機能語にはひらがな、外来語にはカタカナといったように、品詞や語源等により文字種の書き分けが決まっている。

現代日本語の小説も一般的に漢字仮名まじりで書かれるが、特定の語句が文字種の書き分けの規則から外れて表記されることがある。例えば、幼児の話し言葉では、ひらがなの多用によって幼さが表現される(岡崎・南, 2011)。大人の話し言葉でも、耳にした語が十分理解できず、「適切な字を思い浮かべることができなかった」状況等で、漢字に代わってカタカナが使用され、「話し手の理解という目に見えない状態」を表現することが可能となる(金水, 2018)。

このように、日本語の小説では文字システムの特性を生かし、使用する文字種の操作によって音では表しえない意味を視覚的に表現し、特殊な効果をもたらすことができるが、作品が他言語に翻訳される際、この手法はどう対応されるのか。実は日本語のように 3 つの文字種を使い分ける言語は珍しく、世界の言語の多くは 1 文字種しか持たない。本発表は、ケーススタディとして村上春樹(著)『海辺のカフカ』に登場するナカタさんの話し言葉と他言語の翻訳を分析することによって、この問題について考える。ナカタさんは子供の時のある事件を境に記憶、識字能力を失った初老の男性であり、彼の話し言葉において、比較的抽象度の高い意味の漢語や馴染みのない地名などはカタカナで書かれている(「キンユウロン」「ホジョ」「トーメイ(東名)」等)。これは彼がその語の意味を理解しておらず、単に音の羅列としてでしか捉えていない表れとして解釈できるが、表音文字であるアルファベットのみを使用する英語の翻訳版では、誤った綴り、マラプロピズム、音節ごとにハイフンで区切る、といった 3 つのテクニックの適用が観察された(山木戸, 2018)。本発表では、英語以外で表音文字のみを持つ言語(フランス語、ロシア語、韓国語等)と、表語文字のみを持つ言語(中国語)の翻訳版の両方を考察し、変則的なカタカナ表記の訳出のテクニックと、表音・表語の文字システムの違いによって対応がどう異なるのかを分析する。

【参考文献】

金水敏(2018)「小説における仮名の一用法と翻訳—村上春樹作品を例に—」『ことばと文字』10: 83-89.

村上春樹(2002)『海辺のカフカ ＜上＞』東京: 新潮社.

岡崎友子・南侑里(2011)「役割語としての「幼児語」とその周辺」 金水敏(編)『役割語研究の展開』pp. 195-212. 東京: くろしお出版.

山木戸浩子(2018)「日本語の文学作品における言語変種の英語翻訳—村上春樹(著)『海辺のカフカ』ナカタさんの話し言葉から考える—」『通訳翻訳研究への招待』19: 1-21. 日本通訳翻訳学会

第2日(9 月 3 日) A **会場**(C301) 10:00 – 10:30

A-6 **司会**: **飯田奈美子**

「日本におけるトランスレーション・ポリシー」プロジェクトの活動報告

武田 珂代子(立教大学)、辛島 デイヴィッド(早稲田大学)、宮田 玲(東京大学)、島津 美和子(立教大学)、吉田 理加(愛知県立大学)

本発表では、JAITS 研究プロジェクト「日本におけるトランスレーション・ポリシー(TP)」の 2022 年度における活動を報告する。本プロジェクトの研究会では、TP に関連するゲストスピーカーのレクチャーや各メンバーの調査研究報告に基づく討議を行なっている。

まず、以下の 3 個人・組織によるレクチャーと討議内容について述べる。①アンソニー・ピム氏(メルボルン大学)のレクチャーでは、TP と言語政策との関係、州政府によるパンデミック情報の翻訳の効果に関するメルボルンでの調査と課題解決に向けた提言について学んだ。それに基づき、多言語・多文化コミュニティーに向けたコミュニケーションにおける「信用」と「連携」の重要性について討議した。②元・米国務省専属通訳官のレクチャーでは、同省言語サービス部のポリシー全般、特に日本の外務省との違いなどを学んだ。討議では、用語管理の問題や資料の事前提供に対する考え方などが話題となった。③自治体国際化協会(CLAIR)多文化共生課職員によるレクチャーでは、同課の概要および自治体の多言語対応用の各種ツールなどが紹介された。それらツールへのアクセス方法や利用状況、各自治体との連携などについて質疑応答を行なった。

次に、各メンバーによる調査研究の進捗報告に基づく討議について紹介する。まず、「国の法令および自治体の条例中の翻訳・通訳」に関する調査報告があり、法令や条例で直接翻訳・通訳に関する項目が少ないことが確認された。各自治体の基本計画やガイドラインの中で翻訳・通訳に関する部分に焦点を当て、基本的アプローチや多言語対応の予算などに注目する重要性について討議した。また、在ジュネーブ国際機関での通訳・翻訳ポリシー(通訳者・翻訳者の採用と人材管理、機械翻訳の導入など)に関する聞き取りの報告があった。討議では、大量の日英翻訳を扱う世界知的所有権機構(WIPO)における人材採用や機械翻訳開発における課題が主なテーマとなった。そのほか、自治体横断型翻訳資源の構築、防衛省の翻訳通訳担当専門職に関する調査、コミュニティ通訳に対する自治体の考え方に関する聞き取り、ウクライナ避難民支援での自治体の言語対応に関する調査といった取り組みの進捗状況、また、国際学会での講演、研究発表、論文執筆に関する報告に基づく討議も行なった。

最後に、以上の総括を行ない、今後の活動計画を紹介する。

第2日(9 **月** 3 **日**) A **会場**(C301) 10:40 – 11:10

A-7 **司会**: **飯田奈美子**

最近の通訳現場の状況に関する報告:オンライン通訳と AI

高橋絹子(関西大学)

コロナ禍以降、オンライン通訳という新たな通訳スタイルが導入されたことはすでに報告されている(松下 2020)。これに基づき 2021 年 3 月に実施された通訳者の稼動の現状を問うインタビュー調査では、ほぼ 100%近くの案件がオンラインで実施されていた(高橋 2022)。1 年後の 2022 年 2 月から 3 月の調査においては、一部のハイブリッドの現場を除き、依然としてほとんどの案件がオンラインで行われていた(高橋 2023)。

その 1 年後の 2023 年 3 月ごろから、通訳や翻訳に関連して AI がよく話題になるようになった。語学の授業等で学生による AI の使用に関して、大学によってはガイドラインを策定したところもある。ではオンラインで通訳が行われている現場では、AI の利用はどのようになっているのだろうか。

この問題を探るべく 2023 年 5 月にアンケート形式で調査を実施した。具体的には、通訳現場における AI による通訳の現状をたずね、将来の AI による通訳の利用に関して、通訳者の考えを聞いた。対象となったのは、日英の通訳者 9 人で、通訳歴は平均 24 年であった。

調査の結果、回答者の 67%は「AI と通訳の双方が利用されている現場を経験したことがない」と答えたのに対し 33%は「経験がある」と回答している。ただ「頻度は少ない」か、「経験したことがあるという程度」と答えている。経験が豊富な通訳者が稼動するような現場では、まだ AI はあまり導入されていないとも考えられる。また「将来、通訳者が AI と共存するようになるか否か」との質問に対しては、89%は「共存する」と答えている。しかし「通訳者が AI にとって代わられると思うか」という質問に対しては、67%が「とって代わられることはないと思う」と答え、残りの 33 %も条件つきで「とって代わられることはない思う」と答えた。「共存する」とは思われるものの「ヒトでなければ不可能な点がある」として、そのような考えに至っているようだ。本調査では、さらに詳しく理由をたずね、AI では不可能に近いと想定される通訳の具体的な実例も回顧してもらった。現段階では、確かにヒトでなければできない通訳が存在していることが確認できる。これは、現場の通訳者ならではの報告であるが、一般的にはどの程度認知されているのであろうか。

今後も追跡調査を実施し、さらに対象者も広げ、変化を注視していきたい。また報告に基づき、大学、大学院での通訳演習のあり方も検討する必要が出てくることが予想される。

【参考文献】

松下佳世(2020)「コロナ禍における遠隔通訳の実施状況調査」『通訳翻訳研究』 第 20 号:125-146

高橋絹子(2022)「コロナ禍における新たな通訳スタイルと通訳の将来の展望に関して」『関西大学外国語学部紀要』第 26 号:69-88

高橋絹子(2023)「オンライン通訳と視覚情報－通訳とは何か？－」『関西大学外国語学部紀要』第 27 号:109-123

第2日(9 月 3 日） A **会場**(C301） 11:20 – 11:50

A-8 **司会**: **飯田奈美子**

翻訳者の現場離れは防げるか:翻訳者の労働生活の質とモチベーションを測定する心理尺度の開発

阪本章子(関西大学)

機械翻訳や翻訳プロジェクトプラットフォームの普及で、翻訳者の仕事に変化が起きている。人手翻訳から機械翻訳のポストエディットに仕事の中心が移行し、仕事の「ギグワーク」化が進み、仕事の内容・楽しさ・料金などで翻訳者の労働生活の質が低下している状況下（Moorkens, 2020)、今後、翻訳業から離職したいという翻訳者、そして翻訳の仕事につきたくない若者が増える可能性が高い。本研究は、翻訳産業界が適切な労働力を持続的に確保するための実証的データを提供することを最終目的とし、「どのような属性を持つ翻訳者が高い労働意欲を持つか、または離職の可能性が高いか」「労働意欲を高める要因はなにか」という問いに、心理学の手法をつかって答える。

具体的にはまず、翻訳業で生計を立てる労働者（翻訳者）の労働生活の質（Work-Related Quality of Life：WRQoL）とモチベーションを測定する。翻訳者独特の労働者特性を適切に反映した心理測定尺度（Translator WRQoL Scale）を作成し、[a]労働生活の質、[b]仕事に対するモチベーション、 [c]翻訳テクノロジーに対する態度、の３つの構成概念とその下位概念を測定する。また回答者の労働者プロファイルデータも収集する。次に、収集したデータをつかって、[a], [b], [c]の３項目（とその下位概念）と、労働者のプロファイル（年齢・性別・経験など）の相関・因果関係を、構造方程式モデリング（SEM）で調べる。これにより、どのようなプロファイルの翻訳者が、またテクノロジーに対してどのような考え方を持つ翻訳者が、将来の翻訳の仕事に対し高いモチベーションを持っているのか、モチベーションの低い翻訳者はどんな翻訳者か（その原因は何か）を解明する。SEM は要因間の相関関係だけでなく因果関係も測定できる利点がある。これにより、将来の翻訳者のリクルートや労働条件管理に有益なデータを提供することができる。

Translator WRQoL Scale は世界中の様々な職場で使われている WRQoL 尺度（Easton & Van Laar, 2018）を翻訳者用に調整して現在作成中であるが、作成するにあたって、WRQoL 尺度ではカバーできない翻訳者独特の要因があることがわかった。本発表では、その要因の理論的枠組みを心理学と翻訳学の双方から議論する。さらに、翻訳学内でみられる研究手法上の課題への取り組みと、第１予備調査で得られた翻訳者を取り巻く労働環境を示唆するデータを提示する。

【参考文献】

Easton, S., & Van Laar, D. (2018). *User manual for the work-ralated quality of life (WRQoL) scale second edition*. http://www.qowl.co.uk/researchers/WRQoL User manual 2nd Ed ebook Feb 2018 55.pdf

Moorkens, J. (2020). “A tiny cog in a large machine” Digital Taylorism in the translation industry. *Translation Spaces*, *9*(1), 12–34. https://doi.org/10.1075/ts.00019.moo

第2日(9 **月** 3 **日**) A **会場**(C301) 13:45 – 14:15

A-9 **司会**: **石原知英**

テキスト理解モデルを援用した翻訳指導実践:学習者の翻訳と村上春樹による翻訳の比較分析に焦点をあてて

辰己 明子(長崎外国語大学)

本研究の目的は、翻訳演習を履修する学習者 12 名(2 年生から 4 年生)を対象に、テキスト理解モデル(1983)を援用し、英語から日本語への翻訳指導(全 14 回)実施後に、小説を用いた最終翻訳課題にて、学習者の翻訳と村上春樹による翻訳を比較分析させ、比較分析による学習者の気づきを明らかにすることである。これまでの研究において、染谷(2010)と辰己(2015)により一般英語学習者を対象とした翻訳指導実践報告がなされている。これら先行研究の課題として、日本語として不自然な訳文や誤訳を考慮した翻訳指導の検討が課題として挙げられる。不自然な訳文の産出は学校教育で行われる英文和訳の指導、そして、誤訳の原因は学習者の文法理解が影響していることが考えらえる(染谷, 2010;辰己, 2015)。そこで本研究では、先行研究の課題を踏まえ、本研究で実施した全 14 回の翻訳指導では、文法事項に焦点をあてた翻訳演習に加え、様々なテクストを翻訳指導材料として用い、英文和訳から翻訳への転換を目指したテキスト理解モデルを援用した翻訳指導を行った。学習者の英語力(TOEIC 400 点から 740 点)が異なるため、学習者の英語力を考慮し、理解可能な語彙レベルの絵本、小説、漫画などを翻訳指導材料として用い、翻訳指導後に実施した。翻訳課題選定の際には、学習者の興味・関心も考慮した。毎回の翻訳指導では、個人での翻訳課題取組後、ペア又はグループでの翻訳課題取組を実施した。14 回目翻訳指導後に実施した最終翻訳課題を分析の対象とした。最終翻訳課題は、翻訳教室(2013)で扱われた Raymond Carver による *Popular Mechanics* を用いた。初めに、学習者に *Popular Mechanics* の翻訳課題部分を翻訳させた後に、村上春樹の翻訳と自身の翻訳を比較分析させた。比較分析させた結果、学習者は、翻訳において、1) 日本語力が求められること、2) 文脈に応じた適切な訳語を選択すること、3) 読み手に訴えかける訳語を選択すること、4) 主語と代名詞の訳し方により、自然でわかりやすい翻訳が産出されることが重要であると捉えていることがわかった。

【参考文献】

Kintsch, W., & van Dijk,T. A. (1978). Toward a model of text comprehension and production. *Psychological review*, *85*(5), 363-392.

柴田元幸 (2013)『翻訳教室』朝日新聞出版.

染谷泰正 (2010)「大学における翻訳教育の位置づけとその目標」『外国語教育研究』第 3 巻: 73-102.

辰己明子(2015)「大学英語教育における翻訳指導に関する研究」『通訳翻訳研究への招待 第 1 巻: 67-82.

第2日(9 月 3 日) A **会場**(C301) 14:25 – 14:55

A-10 **司会**: **石原知英**

ディクテーションが聴解と訳出に与える影響について

楊 潔氷(河南理工大学)

ディクテーションは聴解力訓練法や通訳訓練法としてしばしば外国語の教育現場で用いられている(e.g., 長坂, 2010;大岩・赤塚, 2019)。近年、通訳・翻訳国家資格試験を受けようとする学生が増えている。通訳試験の場合、聴解選択問題と文章の聴訳問題が出題される。聴解選択問題とは会話文や説明文を聞き、4 つの選択肢から正解を選び出す問題である。聴訳問題とはニュースのような文章を聞き、内容を一定の字数内で翻訳する問題である。本研究はこれらの設問の問題文を参考に、ディクテーションを授業に取り入れ、ディクテーションが聴解と訳出に与える影響について検討する。

授業では全 10 回のディクテーション訓練を行い、訓練前後にテストを行った。29 名の大学三年生(後期)が授業に参加した。訓練材料は難易度が初級から上級までの昔話、小説、NHK ニュースであった。毎週 2 コマ(50 分/コマ)の授業で 1 コマ目では翻訳の理論やテクニックについて例文を挙げながら紹介・討論し、2 コマ目ではディクテーションを行った。ディクテーションの手順は表 1 に示す。④は宿題としてクラウドクラスに提出するように求めた。

表 1 ディクテーションの手順

ステップ	ポイント	詳細
①	大筋をつかむ	文章全体を聞き、大筋をつかむ
②	ディクテーション	文章を区切り、少しずつ聞きながら書く
③	チェック	文章を一文ずつ聞きながら、書いた内容を自己修正
④	朗読と翻訳	原文を朗読し、中国語に翻訳

訓練前後のテストは聴解選択問題(5 問×2 点)、聴解穴埋め問題(10 問×1 点)、単文聴訳問題(日中・中日:各 2 問×4 点)、文章聴訳問題を含んだ。問題文は『日语口译综合能力 3 级』や NHK ニュースから抜粋し、テストの難易度を統制した。評価は訳出の正確さと自然さを基準に採点を行った。なお、アイディア・ユニットとニュースの 5W1H を参考に、1 つの述語と変項を 1 つの情報のまとまりとし、時間や場所を 1 つの情報単位として数えた。1 つの情報は 1 点とし、訓練前の文章聴訳問題の満点は 30 点で、訓練後のそれの満点は 31 点であった。訓練前後の成績は表 2 に示す。

表 2 訓練前後のテストの平均点と標準偏差

選択問題		穴埋め問題		日中単文聴訳問題		中日単文聴訳問題		日中文章聴訳問題	
訓練前	訓練後	訓練前	訓練後	訓練前	訓練後	訓練前	訓練後	訓練前	訓練後
8.07	8.76	7.45	7.07	2.29	3.00	1.62	3.28	2.21	3.24
(2.07)	(2.06)	(1.40)	(1.26)	(1.55)	(1.53)	(1.45)	(1.37)	(3.50)	(4.17)

訓練前後の成績を t 検定で分析した結果、選択問題、穴埋め問題と文章聴訳問題の成績に有意差がみられなかった(t (28)=1.51, p>.10;t (28)=1.09, p>.10;t (28)=1.26, p>.10)が、単文聴訳問題の成績に有意差がみられ(t (28)=2.30, p<.05;t (28)=6.37, p<.01)、訓練の効果がみられた。文章聴訳問題の成績をみると、床効果が生じたことが分かった。ただし、個々人の成績をみると、訓練を経て、10 点以上上がった学生もいれば、1 点も上がらなかった学生もいた。今後、学生の日本語能力を基にグループ分けをし、各グループに適用できるような訓練教材と訓練方法を用い、コースデザインを改善していく。

第2日(9 **月** 3 **日**) A **会場**(C301) 15:05 – 15:35

A-11 **司会**: **石原知英**

知識を媒介とする翻訳教育教授法の検討:起点言語文書要素メタ言語を例として

朴惠(東京大学)、山本真佑花(東京大学)、影浦峡(東京大学)、藤田篤(情報通信研究機構)

翻訳需要の拡大および翻訳環境の変化の中で、十分な品質の翻訳を産出可能な翻訳者を多数養成することの重要性が高まっており、大学院レベルの翻訳者養成コースは世界的に増加している。しかし、そのカリキュラムの多くは、科目構成までは明示的に定義しているものの、翻訳者に求められるコンピテンスをいかに涵養するかの手続きには詳しく触れていない。その結果、授業は個々の教員に依存し、ひいては教育の質にばらつきが生じかねない。この問題を解決するには、目標とするコンピテンスの涵養のために、知識を媒介として実践力の修得を導く体系的かつ解像度の高い教授法の開発が不可欠である。

本研究では、知識を媒介とする翻訳教育の実行可能性と有効性を検証するために、翻訳に関与する対象やプロセスを記述するために設計されたメタ言語を利用する。具体的には、宮田・宮内(2022)で開発された起点言語文書要素(以下、SD 要素)メタ言語を用いて、翻訳の前準備として起点言語文書を分析する際にメタ言語を利用することが訳文にもたらす影響を評価することを目的とした実証実験を行った。

実験では CEFR B2 レベル以上の英語力をもつ日本語母語話者を対象にし、SD 要素メタ言語を使用せずに翻訳前準備を行った翻訳と、SD 要素メタ言語を使った分析例を提示したのちに翻訳前準備を行った翻訳とを比較した。課題文書に関しては、難易度の近い英文文書 2 つを選定したが、個々の文書性質に由来する影響を排除するために、参加者ごとに異なる順序で提示した。2 件の翻訳タスクを正しく遂行できた参加者 13 名の訳文を豊島ら(2016)で開発された校閲カテゴリ体系を用いて評価した。結果の分析から、SD 要素メタ言語の使用は、参加者の訳文におけるイシューの数において中程度の効果量を示す場合があり、訳文の質の向上をもたらす可能性があると考えられる。また、SD 要素メタ言語を使用せずに行った翻訳前準備では、多くの参加者の調査対象は語の意味や概念に、調査方法は辞書引きや Web 検索に限られていたことが明らかになった。翻訳完了後に実施したアンケート調査と半構造化インタビューでは、翻訳前準備の重要性に対する認識の促進や、その際の俯瞰的視点の採用などに言及するコメントが多く見られた。

今後、翻訳にかかわる他のメタ言語をも利用した、体系的に学習者が意識を向けることができるようなプロセスを組み込んだ翻訳実習モデルを構築し、公開する予定である。

【参考文献】

豊島知穂・藤田篤・田辺希久子・影浦峡・Anthony Hartley(2016)「校閲カテゴリ体系に基づく翻訳学習者の誤り傾向の分析」『通訳翻訳研究への招待』第 16 号:47–65.

Miyada, R. & Miyauchi, T. (2022). Metalanguages for source document analysis: Properties and elements. In R. Miyata, M. Yamada & K. Kageura (Eds.) *Metalanguages for dissecting translation processes: Theoretical development and practical applications* (pp.63–79). London: Routledge.

【注】

実験設計する際にご討論頂いた宮田玲氏、宮内拓也氏、訳文評価作業にご協力頂いた田辺希久子氏に感謝する。本研究は JSPS 科研費(課題番号: 19H05660)の助成を受けたものであり、東京大学倫理審査専門委員会の承認を得て実施された(承認番号 22-265)。翻訳メタ言語は https://tntc.p.u-tokyo.ac.jp/で公開されている。

第1日(9 **月** 2 **日**) B **会場**(C302) 10:45 – 11:15

B-1 **司会**: **平塚ゆかり**

日本における現役のロシア語通訳者の継続的学習:実践コミュニティにおける協働学習及び個人学習を通じた熟達化

ベリャコワ・エレーナ(立教大学 D)

【背景】

現役のロシア語通訳者に対する質問紙調査の結果、個人学習とロシア語通訳協会を中心に行われてきた協働学習が広く普及している状況が見られた(ベリャコワ, 2022)。個人学習と協働学習の関係及び学習に影響を与える要因を深掘りするために、現役のロシア語通訳者に対するインタビューを実施した。

現役通訳者のスキル開発を検討する際には、2000 年代から通訳研究に導入された Ericsson による熟達理論と意図的練習(Deliberate Practice)という概念が使われることが多く、熟達化は今や活発に議論される領域となっている(Ericsson, 1993;Moser-Mercer, 2021)。Ericsson は、経験のみにより novice が expert になるのは不可能であると指摘し、意図的練習の役割を強調している。講師によるフィードバックの必要性を強調する Ericsson とは異なり、通訳研究においては、意図的練習は個人のパフォーマンスの特定の側面を改善するために、講師とパフォーマンスをする人自身により設計された練習の両方を対象することが多い。さらに、Tiselius(2013)は、経験と熟達の関係について考察し、主なスキルの意図的練習なしでも熟達が可能かもしれないと、とまで指摘している。

本研究では、筆者が実施した現役のロシア語通訳者のインタビューなどを基に、仕事の頻度、経験年数等の要因が通訳者の意図的練習の有無、学習形式にどのような影響を与えているか検証する。特に、同時通訳の場合、仕事の頻度が少ない中で、意図的練習が必要になるという通訳者の認識が明らかになり、個人学習だけではなく、緊張の中で練習できる協働学習の有益性が語りから浮かび上がった。

次に、現役の通訳者の継続的学習に対する意識を明らかにし、個人学習及び実践コミュニティにおける協働学習について、フィードバック、自己調整などの観点から考察する。協働学習は個人学習の動機付けになるケースが見られ、モチベーション維持が困難になるときに、実践コミュニティにおける協働学習が有益になりえる。

日本におけるロシア語通訳者の状況に基づいた考察であるが、実践コミュニティにおける協働学習及び個人学習に焦点を当てることで、現役の通訳者の学習及び熟達化への示唆を得ることを目指す。

【参考文献】

ベリャコワ E. (2022)「日本における日露通訳者のインフォーマルな学習及びノンフォーマルな学習」『通訳翻訳研究への招待』第 24 号

Ericsson, K. et al. (1993). The role of deliberate practice in the acquisition of expert performance. *Psychological Review*, 100-3: 363-406.

Moser-Mercer, B. (2021). Conference interpreting and expertise. In M. Albl-Mikasa & E. Tiselius (Eds.), *The Routledge Handbook of Conference interpreting* (pp. 386-400). Routledge.

Tiselius, E. (2013). Experience and expertise in conference interpreting: An investigation of Swedish conference interpreters. Dissertation for the degree of PhD at the University of Bergen.

Zimmerman, B.J. (2006). Development and adaptation of expertise: The role of self-regulatory processes and beliefs. In K. Ericsson et al. (eds.). *The Cambridge Handbook of expertise and expert performance* (pp.705-722). Cambridge.

第1日(9 **月** 2 **日**) B **会場**(C302) 11:25 – 11:55

B-2 **司会**: **平塚ゆかり**

大学の通訳教育における講義科目の意義と課題についての考察

西畑 香里(東京外国語大学)

本発表では、大学の通訳教育の講義科目に着目し、その意義と課題について、授業実践をもとにした取り組みを例に挙げて考察を行う。

日本の大学・大学院における通訳教育の実態に関する研究として、染谷他(2005)が行ったアンケート調査では、開講されている通訳関連科目は、全体の約 60%が 20 名以下の受講者数で、語学力の向上を目指した演習科目が大半を占めていることが明らかになっている。また、受講者数が 100 名前後のクラスは講義科目と位置づけられ、100 名以下(2%)と 100 名以上(2%)の合計 4%が該当すると考えられ、大学教育の中での通訳関連科目に学問としてのきちんとした位置づけを与えるためにも、講義科目がもっと増えてもよいと思われるとの言及がされていた。

染谷他(2005)の追跡調査として行われたアンケート調査(高橋他 2022)では、全体の 50%以上が 10～20 名の受講者数で、約半数が語学力の強化を重視した重視した演習授業が行われていることが明らかになっている。講義科目と位置付けられるクラスについては、受講者数 99 名以下は 4%、100 名以上については選択肢が設定されていなかった。以上のことから、前回調査に引き続き、演習科目としての開講が大半を占めていることがわかり、講義科目が大幅に増加しているような顕著な傾向は見られない。

講義科目については、実践報告等の情報も比較的少ない状況があるが、西畑(2021)は、講義科目の果たし得る役割について考察する中で、通訳業界に関する社会的な課題をテーマとして取り上げることができる点を挙げている。通訳業界に関する社会的な課題については、プロ通訳者を対象にアンケートを行った新崎他(2019)のキャリアに関する通訳者の認識の調査研究で、通訳の仕事に対する社会的認知が低く、通訳の仕事が社会的に正しく理解されていないこと等、通訳者が感じている問題意識が明らかになっている。

大学の通訳教育の実態調査においては、授業で使用するテキストが今後検討すべき課題として言及されており(染谷他 2005; 高橋他 2022)、既存の講義科目においても、また今後講義科目の開講数を増やしていくことを見据えても、授業でテキストとして使用できるような適切な教材の不在は課題であると考えられる。本発表の中では、授業実践の事例やテキスト作成についての取り組みについても言及していく。

【参考文献】

西畑香里(2021)「通訳の仕事に対する社会的認知をめぐる問題について—大学の通訳教育における講義科目の役割考察—」『通訳翻訳研究』第 21 号:119-139

新崎隆子・石黒弓美子・板谷初子・北間砂織・西畑香里(2019)「キャリア形成に関する通訳者の認識」『通訳翻訳研究』第 19 号:1-21

染谷泰正・斎藤美和子・鶴田知佳子・田中深雪・稲生衣代(2005)「わが国の大学・大学院における通訳教育の実態調査」『通訳研究』第 5 号:285-310

高橋絹子・大井川朋彦・石塚浩之・稲生衣代・内藤稔(2022)「日本の大学・大学院における通訳関連科目に関する全国調査報告」『通訳翻訳研究』第 22 号:92-112

第1日(9 月 2 日) B 会場(C302) 13:40 – 14:10

B-4 司会: 長沼美香子

ウクライナ避難民支援での自治体の言語対応:音声翻訳プログラムの使用を中心に

武田 珂代子(立教大学)

2022 年 2 月ロシアによるウクライナへの軍事侵攻が始まって以来、日本は 2000 人以上のウクライナ人を「避難民」として受け入れてきた。従来から、日本における難民認定率の低さは国内外で問題視されていたが、世界情勢の急激な展開に影響された政治的・外交的な状況下で、日本政府は特別措置としてウクライナ避難民の支援・受け入れを積極的に打ち出した。本発表では、ウクライナ避難民の実際の受け入れ業務に急遽携わることになった自治体が、避難民との口頭でのやりとりにどう対応してきたかについて、アンケート調査と聞きとりをもとに、初期的考察を提示する。

まず、日本国内で使用者が少なくこれまで自治体行政がほとんど扱ったことのない言語であるウクライナ語への対応や、ロシア語の使用やロシア出身者との接触について配慮が必要な状況において、自治体がどのような工夫をして言語的対応をしたのかについて、通訳者の手配や音声翻訳プログラム(ポケトーク、VoiceTra など)の使用といった取り組みの概要について述べる。その際、自治体の多言語対応における実績や制度的基盤の有無、また、自治体が国際交流協会、各種 NPO、避難民支援者と連携する仕組みなどと関連づけた分析を試みる。

次に、アンケート調査に回答した 112(2023 年 5 月 30 日現在)の県市区町村における音声翻訳プログラムの使用に関する分析を行う。総務省による「多言語音声翻訳サービス」の導入ガイドや広く報道された企業からの「音声翻訳機」寄贈といった背景状況にも関わらず、ウクライナ避難民への対応で何らかの音声翻訳プログラムを少しでも使用した県市区町村は 56%にとどまった。使用した主な理由は「使いやすさ」と「無償だから」であり、手軽さとコスト面が重視され、「性能の良さ」は最優先事項ではなかった。実際、音声翻訳プログラムのみで必要なやりとりのすべてが遂行できたわけでなく、職員が英語やわかりやすい日本語で対応する、ウクライナ語の通訳者を手配する、筆談を行うなど、状況に応じていくつかの方法を組み合わせる工夫をしながら、避難民に対応していることが明らかとなった。

最後に、これらの調査結果に基づき、今後考察を深めるべき点について述べる。特に、行政組織の多言語対応における態度、実践、人材資源管理、他組織との連携に目を向けるトランスレーション・ポリシーという枠組みでの考察の可能性を示す。

第1日(9 **月** 2 **日**) B **会場**(C302) 14:20 – 14:50

B-5 **司会**: **長沼美香子**

無料匿名性感染症検査会 iTesting@Nagoya における多言語アウトリーチ実践報告:「プリエディット(前編集)」の工程に着目して

吉田 理加(愛知県立大学)、今橋 真弓(名古屋医療センター)、金子 典代(名古屋市立大学)

無料匿名性感染症検査会 iTesting@Nagoya とは、厚生労働省科研費補助金「iTesting チャネルによる HIV 検査体制の構築と確立のための研究(22HB0101)」(代表者 今橋真弓)の助成を受け、名古屋市で年に 3 回(300 名/回)HIV、梅毒、B 型肝炎、C 型肝炎の検査を匿名無料で実施しているものであり、本研究も上記科研費の助成を受け、外国語話者へのアウトリーチを研究している。本発表では、主に機械翻訳を使用する際に起点言語(日本語)に施した「プリエディット(前編集)」とその効果について詳細を報告する。

2022 年度は 6/26・9/4・12/4 の計 3 回検査会が実施された。検査会について外国語話者コミュニティに広くアウトリーチするために HP を日本語・英語・ポルトガル語・スペイン語・ベトナム語に翻訳して展開した。予約サイトについては、2022 年度は日本語と英語で運用し、2023 年度に多言語で運用するための準備をすることにした。結果通知サイトについては検査会社のシステム全体に関わるため、機械翻訳を使用せざるを得なかった。そのため、Miyata & Fujita (2021)の方略に基づき、起点テクストの日本語を「プリエディット(前編集)」し、機械翻訳の精度をあげる工夫を施した。Miyata & Fujita (2021) では、情報の付加、修飾関係を明確にすること、短い文の使用、標準化の4つを最も重要な「前編集」のための明示化方略と位置付けている。

そこで、まず、日本語原文を Google 翻訳でポルトガル語、スペイン語、ベトナム語に機械翻訳し、その後人間の各言語の翻訳者が反訳チェックを実施し、問題となる箇所・表現を指摘した。機械翻訳の問題が指摘された箇所は、固有名詞、ダイクシス、漢字4語から成る語彙が含まれる箇所が多くみられた。特に、ベトナム語への機械翻訳がもっとも困難を提示していた。

より正確な自動翻訳を達成できるように Miyata & Fujita (2021) の4つの方略を適用し「プリエディット(前編集)」を行った結果について報告する。

最後に、今後の課題として一般には Google 翻訳などの機械翻訳の正確性の問題意識が欠如しがちであり、「プリエディット」や「ポストエディット」などの人手をかける必要性の認識をいかに広めるかが重要であることを確認する。

【参考文献】

Miyata, Rei. & Fujita, Mamoru. (2021). Understanding Pre-Editing for Black-Box Neural Machine Translation. *Proceedings of the 16th conference of the European Chapter of the Association for Computational Linguistics (EACL)*, pp. 1539-1550. https://doi.org/10.48550/arXiv.2102.02955

第2日(9 月 3 日) B **会場**(C302) 10:00 – 10:30

B-6 **司会**: **大久保友博**

日本語の話法の翻訳方略:『伊豆の踊子』の英語翻訳を事例に

佐川寛知(神戸大学 D)

翻訳方略や翻訳者の文体を分析する際に、分析対象として「話法」が取り上げられることが少なくない(Baker, 2000; Bosseaux, 2007; Huang & Chu, 2014; Saldanha, 2011 など)。原文と訳文との間で大きな差異が出やすいからだ。特に日本語の話法は間接話法として英訳されやすく、逆に日本語訳する際には直接話法になりやすいことが知られている(伊原, 2011)。一方で、佐川(2023)では、伝達節と被伝達節を分割し、それぞれを別の1文として訳出する「直接引用句分離型」(DQ 分離型)での翻訳の方が多いことを示している。話法の訳文分析には、先行研究間での結果に大きな相違が見られる。また、佐川(2023)は、日本文学の翻訳者として著名な Edward Seidensticker による *Snow Country* の全文を分析した結果に基づいており、当該研究の結果が単に Seidensticker 自身の特徴に過ぎない可能性がある。

そこで本発表では、川端康成の短編小説『伊豆の踊子』に出現する話法を抽出し、Seidensticker による 2 つの英語訳 *The Izu Dancer*(抄訳版と全訳版)と、Martin Holman による英語訳 *The Dancing Girl of Izu* を基に、日本語の話法を英語に翻訳する際の翻訳方略を検討する。特に、日本文学の翻訳に多大な貢献をもたらしたとされる Seidensticker の翻訳方略に焦点を当てる。日本語には、他者の言葉を引用する際に、第 I 類引用構文(誠は「おはよう」と言った)と、第 II 類引用構文(誠は「おはよう」と部屋に入って来た)の二つの表現方法がある(藤田, 2000)。佐川(2023)では、日本語の話法には「第 I 類引用構文による直接(I・直)/間接話法(I・間)」と「第 II 類引用構文による直接(II・直)/間接話法(II・間)」という分類で分析を行なっている。本研究でもこの立場から分析を行なった。その後、日本語原文に対応する Seidensticker 版の英語訳と Holman 版の英語訳を対照分析した。

その結果、Seidensticker の翻訳方略における特徴としては、ある発話の主体とその直前の文における動作の主体が同一主体であると、伝達節を用いずに会話文を提示することが判明した。同様に、話し手の発話時点よりも前に、聞き手となる相手の行動が描写されていると、日本語には存在していた伝達節を英語訳では省略する特徴も見られた。一方 Holman は、発話主体の話し始めであれば都度伝達節を付加する特徴があることがわかった。本発表では、日本語話法の同定方法を提示した上で、具体的にいくつかの例を考察しながら、Seidensticker は日本文学を英語訳する際に、可能な限り伝達節を使用せずに会話場面を再現しようとしていたことを示す。

【参考文献】

Baker, M. (2000). Towards a methodology for investigating the style of a literary translator. *Target, 12*(2), 241–266.

Bosseaux, C. (2007). *How Does It Feel? Point of View in Rranslation: The Case of Virginia Woolf into French*. Editions Rodopi B.V.

Huang, L., & Chu, C. (2014). Translator's style or translational style? A corpus-based study of style in translated Chinese novels. *Asia Pacific Translation and Intercultural Studies*, *1*(2), 122–141.

Saldanha, G. (2011). Translator Style. *The Translator, 17*(1), 25–50.

伊原紀子 (2011).『翻訳と話法—語りの声を聞く—』. 松籟社.

佐川寛知 (2023).「日本語の話法の翻訳—Seidensticker 訳 *Snow Country* を事例に—」『国際文化学』(36), 43–67.

藤田保幸 (2000).『国語引用構文の研究』.大阪:明治書院.

第2日(9 月 3 日) B 会場(C302) 10:40 – 11:10
B-7 司会: 大久保友博

The effect of networks on women's language in Japanese comics translations: A case study of X-Men's *Dark Phoenix Saga*

Maurice Alesch (Kyoto University D)

Due to a systematic use of women's language in Japanese translations, female characters who speak in a brash tone in the source texts often end up sounding much softer in the target texts. While this trend of overly feminized language of female characters in Japanese translations has been discussed in the context of novels (Furukawa, 2013) and movie subtitles (Nakamura, 2013), it seems that comics have been ignored so far. However, comics provide fertile ground for research, since the interplay of speech balloons and still images further emphasize the contrast between characters' speech and personality.

Moreover, previous research has mostly focused on text analysis. Nakamura (2013, pp.78-79) carried out a small-scale survey among subtitle translators with the result that all of them felt it sounds more natural to use language corresponding to character archetypes regardless of the language in the source text, but she did not explore their reasoning in more detail. Following Buzelin's (2005) suggestion to apply Latour's actor-network theory to translation studies, this research tries to understand how such translation norms are shaped by examining the interactions of translators and their networks.

In addition to providing a long list of publications and a large cast of characters for extensive comparisons of dialogue, the Japanese X-Men comics translations are part of a relatively small network of translators, editors, and publishers in charge of localizing American superhero comics, making it easier to track connections and interactions.

This presentation will discuss the case of X-Men's *Dark Phoenix Saga*, a story which has been translated into Japanese three times by three different publishers. Overall, the 1997 and 2019 translations, produced by actors operating in a shared network, are very similar, whereas the 2022 version, produced by actors outside that network, generates a quite different translation. In terms of women's language, all three versions employ female-coded language for the female characters, but the 2019 version slightly reduces the number of female speech markers, possibly because of its translation network.

Buzelin, H. (2005). 'Unexpected Allies--How Latour's Network Theory Could Complement Bourdieusian Analyses in Translation Studies'. *The Translator, 11*(2), 193–218.

Furukawa, H. (2013). 'Onnakotoba—Risō No Onnarashisa He No Bunkauchihonyaku'. *Tsūyakuhonyakukenkyū, 13*, 1–24.

Nakamura, M. (2013). *Honyaku Ga Tsukuru Nihongo – Hiroin Ha "Onnakotoba" Wo Hanashitsuzukeru*. Tokyo: Hakutakusha.

第2日(9 **月** 3 **日**) B **会場**(C302) 11:20 – 11:50

B-8 **司会**: **大久保友博**

メタ言語としての英日翻訳方略体系の洗練と検証

山本 真佑花(東京大学)、藤田 篤(情報通信研究機構)、影浦 峡(東京大学)

翻訳者は翻訳産出過程において、起点言語文書の内容が目標言語の読者に伝わるよう様々な操作を行っている。このうち目標言語の品質向上に関する操作は翻訳方略と呼ばれる。翻訳方略を明示的に列挙・整理する研究が進められているが(Chesterman 2016)、その結果が実際に活用されるためには、様々な現象を幅広くカバーできること(網羅性)、一貫した分類ができること(体系性)といった条件を備えている必要がある(Kageura et al. 2022)。体系性を担保するには、個々の操作がどの翻訳方略であるかを判断するための手続きも定められているべきである。山本ら(2021)は、誤りではないが改善の余地がある訳を「素朴訳」、さらなる品質向上のために書き換えられた訳を「適訳」、素朴訳を適訳に書き換える操作を「翻訳方略」と呼び、英日翻訳における翻訳方略を決定リストの形で体系化した。この体系は Chesterman(2016)の翻訳方略体系をもとに構築されており、Syntactic strategy として 13 種類、Semantic strategy として 9 種類、Pragmatic strategy として 10 種類、計 32 種類の方略からなる。しかしながら、体系化の工程において既存の適訳から逆算して得た素朴訳のみを参照している、その際に参照されたのは文単位の訳文のみである、体系化ののちに、複数の作業者による体系の検証作業を行っていない、という 3 つの課題が残っていた。

本研究では、山本ら(2021)の英日翻訳方略体系の網羅性および体系性の向上と、それらの定量的評価を目的として、体系の洗練および検証を行った。洗練作業は、プロの翻訳者が実際の翻訳産出プロセスに沿って作成した文書単位の素朴訳と適訳の対から抽出した約 80 事例を使用して、複数名で行った。具体的には、3 名の作業者が独立して各事例に対する方略を判断した後、各々の結果を比較し、判断の相違がある場合の原因を明確化した。この結果に基づく各方略の定義の精緻化および決定リストの再構築を通じて、英日翻訳方略体系の修正版を作成した。次に、英日翻訳方略体系の修正版の網羅性および体系性を検証した。ここでは、体系の洗練時に参照していないテキストタイプの文書を使用し、体系性を評価するために 3 名の作業者が独立して方略を判断した。そしてそれらの分類結果から網羅性を確認した。また、異なる作業者による分類の一貫性(体系性)を一致率と κ 値を用いて確認し、分類が一致しなかった事例についてはその原因を分析した。

【参考文献】

Chesterman, A. (2016). Memes of translation: The spread of ideas in translation theory (Revised edition). John Benjamins.

Kageura, K., Miyata, R., & Yamada, M. (2022). Metalanguages and translation studies. In Miyata, R., Yamada, M., & Kageura, K. (Eds.) Metalanguages for dissecting translation processes: Theoretical development and practical applications (pp. 15-26). Routledge.

山本真佑花, 山田優, 藤田篤, 宮田玲, 影浦峡. メタ言語としての翻訳方略体系の構築と検証. 言語処理学会第 27 回年次大会発表論文集, 2021.

第2日(9 **月** 3 **日**) B **会場**(C302) 13:45 – 14:15

B-9 **司会**: **吉田理加**

医療通訳者の職務満足感への影響因子の検討

中村 明音(順天堂大学 M)、姜 暁霞(順天堂大学 M)、仙 令羽(順天堂大学 M)、李 鑫(順天堂大学M)、徐 磊(順天堂大学M)、野田愛(順天堂大学)、ニヨンサバ フランソワ(順天堂大学)、大野 直子(順天堂大学)

2022 年末、日本の在留外国人数は前年末比 11.4%増加し、過去最高を更新した(出入国在留管理庁, 2023)。新型コロナウイルス感染症の蔓延の影響により、在留外国人数は一時減少したが、外国人新規入国制限の見直しなどにより再び増加し始めている。外国人の増加に伴い、外国人医療対応の機会も増加が推察される。外国人医療の架け橋となる医療通訳者に関して、その職務満足度に関する研究は少ない。

医療通訳者の職務満足感への影響因子には、様々な要素が考えられる。日本における医療通訳者の報酬は高いとはいえない(杉山, 2016)。森田・吉富(2020)によると、医療通訳はその重責には見合わない低賃金労働である。また雇用形態について、杉山(2016)によれば、日本の医療通訳者は、多くが登録制のため、安定した収入を得られない。そのような中で職務を続ける医療通訳者の医療通訳者の報酬、雇用形態による、職務満足感の影響因子を定量的に分析した研究は、先行研究に見当たらなかった。本研究の目的は、日本国内医療通訳者を対象に、報酬、雇用形態等による、職務満足感への影響因子を質問紙調査により明らかにすることである。

2023 年 2 月から 2023 年 5 月に、医療通訳者に対してオンライン質問紙調査を実施した。質問紙の医療通訳の報酬満足度、雇用形態、医療通訳の職務満足感に関する項目を使用し、分析を行った。

質問紙調査の結果、109 名の有効回答を得た。回答者のうち女性は 94 人、男性が 15 人であった。通訳言語は中国語、英語が半数を超え、韓国語、スペイン語が 1 名ずつであった。雇用形態は非正規雇用者73名、正規雇用者が31名であった。雇用形態について、69名(63.3%)が満足、40名(36.7%)が不満足と回答した。医療通訳の報酬満足度については「多い・どちらかと言えば多い」は 5 名(4.6%)、「適正」が 47 名(43.1%)、「どちらかと言えば少ない・少ない」57 名(52.2%)であった。医療通訳の仕事にやりがいを感じていると答えたのは 104 名(95.3%)であった。職業選択の条件にやりがいを選択したのは 57 名(52.3%)で収入 67 名(61.5%)に次いで 2 番目であった。

研究の結果、雇用形態や収入面で満足感を得ているのは半数程度にとどまっていたが、やりがいや肯定感などの職務満足感は高く、職務満足感に内的因子が強く関わっていることが示唆された。

【参考文献】

出入国在留管理庁(2023)[Online]https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00033.html (2023 年 5 月 26 日)

杉山明枝(2016)「現状における日本の「医療通訳システム」構築のための課題-アメリカと国内自治体における先行事例から-」『大妻女子大学紀要, 社会情報系, 社会情報学研究』25 巻:91-100.

森田直美・吉富志津代(2020)「医療現場における医療通訳者との協働 医療通訳者の立場から期待と提言」『医学教育』 51 巻 6 号:643-649.

第2日(9 **月** 3 **日**) B **会場**(C302) 14:25 – 14:55

B-10 **司会**: **吉田理加**

日本の司法通訳採用認定制度への提言:言語運用能力、倫理、行動規範を包括して

毛利雅子(名古屋市立大学)

日本では 2009 年 5 月から裁判員制度が実施され、それに伴い裁判員法が制定された。また、取調べの可視化(DVD による録音・録画)も導入されつつあり、現在では警察・検察での取調べ可視化も、被疑者の同意を得た重大犯罪については多く実施されている。このように、法制度は徐々に「世界標準」に近似する方向で変遷している。

また経済・社会のグローバル化により、日本国内における外国人犯罪事案また民事事件が増加し、捜査や審査の中で日本語に通じない被疑者や参考人、被害者も増加している。2020年に起きたコロナ禍により、一時的に外国人による犯罪案件は減少したものの、2023 年に入り海外渡航制限も緩和され、WHOもコロナ禍については制限を撤廃したことから、今後は再び旅行者や在留を前提とした来訪者の増加が予想される。

外国人、あるいは日本語に通じないとされる者が犯罪に関わった場合、あるいは日本において民事事件に関係した場合は、被疑者、被害者、証人とどの立場であっても、それぞれ通訳人をつけることが必要とされている。ところが、審議を行う上で非常に重要な言語を扱う司法通訳人は、依然として制度が未設定のままで、現在においても採用、認定は各裁判所をはじめとする司法機関の採用担当者に任されており、日本全国で共通したシステムになっていない。

日本は先進国とされながら、司法通訳人制度については諸外国に大きく後塵を拝しており、通訳人を介した外国人犯罪事案では 21 世紀の現在でも、依然として何の対策も捉えていない。また、司法通訳人として、言語運用能力、通訳能力の必要性は言うまでもないが、加えて通訳人は事案に関する個人情報、秘匿情報にも触れることから、倫理教育、また行動規範についても厳格な審査や教育が必要である。これは、通訳人制度や試験制度を導入しているアメリカ、オーストラリア、欧州(EU)の実例を見ても明白である。よって、採用認定制度を構築するには、言語能力だけを対象とするのは明らかに不十分である。

本論は司法通訳人として活動しつつ研究者としてこの課題を検討してきたが、全てを包括した採用認定制度に必要な項目と具体的な試験について提言を行うものである。

【参考文献】

Cheng, L., Sin, K.K. & Wagner, A. (eds.) (2014). *The Ashgate Handbook of Legal Translation.* Dorchester: Ashgate.

Coulthard, Malcom., Johnson, Alison. & Wright, David. (2017). *An Introduction to Forensic Linguistics.* London/New York: Routledge.

Gonzárez, Vasquez & Mikkelson. (2012). *Fundamentals of Court Interpretation - Theory, Policy, and Practice (Second Edition).* Durham: Carolina Academic Press.

Mikkelson, Holly. (2017). *Introduction to Court Interpreting.* London/New York: Routledge.

Valero-Garcés and Tipton. (eds.) (2017). *Ideology, Ethics and Policy Development in Public Service Interpreting and Translation.* Bristol: Multilingual Matters.

第2日(9 **月** 3 **日**) B **会場**(C302) 15:05 – 15:35

B-11 **司会**: **吉田理加**

通訳を介した子どもの司法面接における課題

水野 真木子(金城学院大学)、Umidahon Ashurova(金城学院大学)、佐藤 道(金城学院大学)

「司法面接」とは、「法的な判断のために使用することのできる精度の高い情報を被面接者の心理的負担に配慮しつつ得るための面接法(仲, 2016, p.2)」である。子どもを対象とする司法面接については、子どもの認知能力の問題もあるが, 周囲のおとなによる誘導や圧力, 面接の繰り返しにより, 記憶の変容が生じたり, 供述が曖昧なものとなったりすることが問題となる。Walker(2013, p.12)は子どもの言語使用は、その発達状況や生育環境によって大きく影響を受けるし、「子どもと大人とは同じ言語を話さない」としている。子どもの司法面接においては、弱者としての子どもの精神的負担を最小限にすることと、正確な情報をより多く引き出すことが両立するよう、工夫された方法を取ることが重要である。その目的でいくつかの面接のガイドラインが考案されているが、よく知られているのがアメリカの National Institute of Child Health and Human Development で開発された NICHD プロトコールである。

プロトコールは、子どもの記憶の変容や情報の汚染が起こらないように工夫されているが、面接に通訳がついた場合もその効果が保てるのか。子どもの話し方や使用する語彙を通訳する際に、通訳者はどのような困難に直面するのか。これらの疑問を解明するため、発表者らは、科研費プロジェクトとして、上記プロトコールを踏まえた模擬面接を行った。1回目は 2022 年 2 月、性的虐待の被害者である 7、8 歳の子どもを想定した面接のシナリオを作成し、それに基づいて面接の場面を発表者らが演じ、それをプロの通訳者 3 名に訳してもらった。子ども特有の語彙、性的表現、罵り言葉などの通訳に困難が伴うことがわかった。2 回目は 2023 年3月に、8 歳の外国人の子ども 3 名を対象に行った。動画で万引きのシーンを視聴してもらい、自分が目撃した内容を通訳を介して語ってもらったが、子どもに自主的に多く語らせるためのオープンクエスチョンのあいまいさに起因する問題や、文化に基づく言語使用の違いと、それから生じる意思疎通の難しさなどが浮き彫りになった。本発表では、上記の模擬面接から得られたデータの分析結果を報告するとともに、要通訳子どもの司法面接をより効果的なものにするための方法について提案したい。

[挑戦的研究(萌芽)「日本語弱者の司法面接法の検討:外国語通訳を介した子どもの証言の心理・通訳学的分析」(研究課題番号:20K20707)2020 年度～2022 年度 代表者:赤嶺亜紀(名古屋学芸大学)]

【参考文献】

仲真紀子(2016)『子どもへの司法面接 ―― 考え方・進め方とトレーニング』有斐閣

Walker, A. (2013). Handbook on Questioning Children: A Linguistic Perspective. Washington DC, USA.

第1日(9 月 2 日) C 会場(C303) 10:45 – 11:55

C-1 C-2

ドキュメンタリー作品『ナディアの誓い』の通訳翻訳学的分析:データセッションでの考察から

「通訳翻訳研究における会話・談話分析の展開」研究プロジェクトメンバー
飯田 奈美子(立命館大学)、齊藤 美野(順天堂大学)、坪井 睦子(立教大学)、蓮池 通子(フリーランス手話通訳士)、水野 真木子(金城学院大学)、吉田 理加(愛知県立大学)

本研究プロジェクトは、通訳翻訳研究における会話・談話分析研究の新たな研究・教育手法として「データセッション」の有効性を実証していくことを目的とした活動を行っている。データセッションとは、あるデータを異なる研究背景をもつ研究者が同時に観て、そのデータから読み取れる事柄についての気づきやデータの観方に関する意見を交換し、当該データの多様な観方を共有する方法である。今年度は昨年度に引き続き、ドキュメンタリー作品『ナディアの誓い」(2018)を研究対象にし、通訳行為における/の表象、また字幕翻訳についての分析を行う。

発表1:「原発話者による社会指標性の表出と翻訳を介した表象行為」(坪井・吉田)
ナディアの帰属するヤジィード教を信奉するエスニック集団を、彼らが置かれてきた歴史的、社会文化的コンテクストに位置付けたうえで、発話者のアイデンティティやイデオロギーに関わる言語使用に焦点をあて、原発話と翻訳テクスト間の社会指標的意味のシフトについて上記コンテクストと絡め考察する。

発表2:「少数言語話者が多数派言語から受ける影響について」(蓮池)
自らの意見や主張を伝えるために通訳を介すことが必須となる少数言語やその話者が受ける多数派言語からの影響について、ナディアの国連スピーチに関する場面を例にあげ、同じ少数言語である日本手話言語を取り巻く状況と比較対照しながら考察する。

発表3:「コンテクストに合わせたコミュニケーション実践としての通訳行為」(齊藤)
活動家らによる英語・北部クルド語=クルマンジー語間の逐次通訳場面の分析からは、ナディアの心情を汲んで通訳者が見解を追加したり、訳出を断ったりし、コンテクストに合わせて通訳行為を含むコミュニケーション実践をしているとわかる。

発表4:「少数言語への通訳行為に関する表象考察」(飯田)
通訳行為の表象分析により、マイノリティ言語を話すナディアのポジション、通訳者の役割、映像における通訳行為の意義を考察する。特に、ナディアが性奴隷体験を話すラジオ局インタビュー場面における通訳行為がどのように表象されているかを分析する。

発表5:「通訳と字幕翻訳の語彙選択について」(水野)
オリジナルの北部クルド語=クルマンジー語の発話が英語通訳でどう表現されるか、また、オリジナルの発話、作品の英語バージョンの字幕、日本語バージョンの字幕に表れる語彙にどのような違いがあり、その背景は何なのかについて分析する。

第1日(9 月 2 日) C 会場(C303) 13:00 – 13:30

C-3 司会: 稲生衣代

日本におけるラグビー通訳者の就業実態調査

松見誌野(名古屋外国語大学)

2003-2004 シーズンに発足した「ジャパンラグビートップリーグ」に替わり、2022 年 JAPAN RUGBY LEAGUE ONE(ジャパンラグビー リーグワン)が開幕した。3つのディビジョンに分かれて複数総当たりを行うリーグワン 2022-2023 シーズンには、23 チームが参入している。イングランド発祥のラグビーというスポーツの世界では、強豪国の多くの母語あるいは公用語が英語で、リーグワン参入チームには強豪国出身の英語話者である外国人監督やコーチ、選手が在籍することから、1 チームを除く22チームがチーム専属通訳者を雇用している。ディビジョン 1 全 12 チームには計 25 名、ディビジョン 2 全 6 チームには計 12 名、ディビジョン 3 全 5 チームには計 5 名合計 42 名の通訳者がそれぞれのチームに所属する[1]。

新崎ほか(2019)は、日本のプロの会議通訳者を対象に質問紙調査を実施し、会議通訳者の実態を明らかにした。一方でラグビー通訳者はもとより、スポーツの世界で活躍する通訳者の実態を明らかにする研究はこれまでほとんどされてきていない。小松(2005)は通訳を形態で分類する中で、会議通訳、ビジネス通訳、コミュニティ通訳、放送通訳、法廷通訳、手話通訳の 6 つの形態を紹介しているが、スポーツ通訳については言及していない。スポーツ通訳の認知度が低いことに加えて、研究協力を得ることが非常に困難であることから、スポーツ通訳研究はこれまでほとんど行われてこなかった。

本調査では、日本におけるラグビー通訳者の就業実態を明らかにすることを目的とし、リーグワン 2022-2023 シーズン参入チーム全 23 チームのうち、チーム専属通訳者を雇用している 22 チームの通訳者を対象に、アンケートを実施した。調査実施期間がシーズン中であることを考慮し、調査方法は無記名の Google Form によるアンケート調査を採用した。各チーム公式ホームページの問い合わせフォームを利用し、チーム専属通訳者に調査協力を依頼する方法、知り合いのラグビー通訳者に直接協力を依頼する縁故法、及び協力者に別の協力者に調査協力を依頼する3つの方法を採用し、日本のラグビー通訳者の就業実態を明らかにする。

【参考文献】

小松達也 (2005)『通訳の技術』研究社

新崎隆子・石黒弓美子・板谷初子・北間砂織・西畑香里(2019)「日本における通訳者のキャリア開発プロセスに関する実態調査」『通訳翻訳研究』第19号:115-136.

【注】

1) チーム専属通訳者の人数については、リーグワン参入の各チーム公式ホームページより、2022-2023 シーズン所属スタッフの役職に「通訳」と明記されている人数をもとに集計した。

第1日(9 月 2 日) C 会場(C303) 13:40 – 14:10

C-4 司会: 稲生衣代

通訳者の使い分けから見るクライアントの通訳者に対する期待

木村護郎クリストフ(上智大学)、高橋絹子(関西大学)

本研究では英語のできる通訳利用者(以下、クライアント)が通訳者に対して求めていることを報告する。先行研究では、ビジネス場面で、英語で意志疎通をはかることが可能な日本語母語話者であっても、通訳者を利用することにはメリットがあり、そのため英語ができても通訳者が利用されていることはすでに報告されている(高橋・木村 2018, 2021)。さらに通訳の存在により、訳出に直接関係しないような、さらなる付加価値があることも報告されている(高橋・木村 2019)。これまでのデータで得られた観点は網羅的ではないことから、今までに報告されていない新たな事柄が得られることを予測し、再度新たなクライアントに、どのように通訳者の使い分けを行っているかに関してインタビューを行った。対象となったのは、通訳者を介さずとも自ら英語の意思疎通に問題はないが、仕事で通訳者を利用することのあるクライアントである。

その結果、本研究において複数から共通して新たに報告されたこととして、使い分けの際に「ニュアンスまで含めた訳出ができるか否か」という点が挙げられた。例としては「通訳者は(自分ではできないような)細かいニュアンスまで伝えてくれて、双方に誤解がなくスムーズに会議が進行してゆく」から英語ができても通訳者を依頼するという報告があげられた。しかしその一方で、「そういう意味ではなく、今のは、こういう意味だ」と補足したり、「(背景知識などの不足により)それでは伝わらない」という時には通訳者に任せておかずに、自らが英語で話してしまったりするという。また発言者のことをよく熟知している場合には、細かいニュアンスまで伝えることができるので、敢えて通訳者を手配せず自分で通訳も行うこともあるとのことであった。

本研究から判明したことの1つとしては、英語のできるクライアントは通訳者に対して、ニュアンスをも含めたより精度の高い通訳や、感情面も含めてその場の雰囲気にあった通訳まで期待していることが結論づけられる。これは発話の真意をくみとることが求められ、要するに、発話者そのものになりきり、発話者とほぼ一体化することである。そしてこれらの要素は現段階では、AI の通訳に求めても得ることができない要素であると考えられる。

【参考文献】

高橋絹子・木村護郎(2018)「どうして英語ができる人が通訳を使うのか? ー日英ビジネス通訳の現場からー」『通訳翻訳研究への招待』第 19 号 91-108

高橋絹子, 木村護郎クリストフ(2019)「通訳の付加価値と限界」日本通訳翻訳学会第 19 回関西支部例会, 京都, 龍谷大学深草キャンパス

高橋絹子, 木村護郎クリストフ(2021)「異言語間コミュニケーション手段としての通訳のメリットとデメリットービジネス通訳の観点からー」関西大学外国語学部『外国語学部紀要』第 25 号 35-50

第1日(9 **月** 2 **日**) C **会場**(C303) 14:20 – 14:50

C-5 **司会**: **稲生衣代**

外交使節団に所属する通訳者の役割意識:日西通訳を介した記者会見を事例に

吉川 祥子(日西通訳者)

本研究は、外交使節団の通訳者の役割意識を探ることを目的とする。

通訳者の役割に関する認識は、中立・正確を最大の命題にするものからコミュニケーションへの主体的な参与者と捉えるものへと移り変わっている(Angelelli, 2004)。ただし、通訳者の役割は常に一定である訳ではない。通訳する「場」や通訳の対象となる人によって異なる制約や必要性が生じ、通訳者の役割はそれを満たすべく常に変化する(同書)。これは対面コミュニケーションに限らない。外交通訳においても通訳者の立場によって役割意識や実際の訳出に差異が発生する可能性が指摘されている。しかし、民間通訳者の立場ではなく、いずれかの外交組織とりわけ外交使節団に所属する通訳者の役割に主眼を置いて行われた実証研究は多くない。

そこで、本研究では外交使節団の通訳者の役割意識を、質問紙調査、テクスト分析、インタビュー調査を通じて考察した。質問紙調査では原則すべての駐日大使館に協力を依頼し、通訳者の役割意識を調査した。テクスト分析では、外交使節団の通訳者が実際に通訳を務めた駐日大使の記者会見 3 本、および外部の通訳者が通訳を務めた会見 1 本を分析した。なお、対象言語はスペイン語である。最後に、前述の記者会見の通訳者 3 名に協力を依頼し、実際の会見の動画と書き起こしを見ながら、訳出の意図などを尋ねるインタビュー調査を実施した。

質問紙調査からは、概ね外交団の一員としての所属意識を持って通訳に臨む回答者像が浮かび上がった。中立性は意識されるものの、必ずしも至上命題とはなっていない。テクスト分析では、原文にない要素を訳文に加える「付加」を分析の枠組みとした。インタビュー調査と併せて分析した結果、外交使節団の事例で見られた付加の多くが外部通訳者の事例でも見られた。しかし、外交使節団の通訳者の付加は、話者や話のテーマを深く知っていることに裏付けられていることが特徴となっていた。外交使節団の一員としての役割意識が、その場・その人に合わせて個別化された付加の形で表出していると考えられる。

【参考文献】

Angelelli, C. V. (2004). *Revisiting the Interpreter's Role*. Amsterdam, Netherlands: John Benjamins Publishing Company.

第2日(9 月 3 日) C **会場**(C303) 10:00 – 10:30

C-6 **司会**: **齊藤美野**

性教育絵本の英日翻訳の事例研究: Making a Baby と『ようこそ！ 赤ちゃん』の比較分析から

古川弘子(東北学院大学)

本研究の目的は、Making a Baby (Greener & Owen 2021)とその日本語訳『ようこそ！ あかちゃん』(艮・浦野訳 2021)を定性的に比較分析することである。本書は5歳から7歳を対象にした子ども向けの絵本で、イギリスで出版された。主な特徴は2点あり、まず妊娠・出産に関わる情報を包括的に伝えていること、そしてイラストで描かれる人々と言葉の選択に多様性が意識されていることである(艮・浦野 2021: n. p)。これらは、世界で主流となっている「包括的性教育」に基づいたものといえる(浅井 2020: 3)。

本書では、妊娠に関しては人工受精、体外受精、精子・卵子提供、代理出産、養子などを紹介しており、出産については流産、早産、普通分娩、帝王切開、一卵性・二卵性双生児、インターセックスの説明がある。さらに、性交は大人が妊娠のためだけではなく愛情を示すためにも行うことや、妊娠の前に二人が同意することが必要であるといった説明や、生物学的な性と自分が感じる性などについての説明もある。最後には「どんな始まり方でもあらゆる家族が素晴らしい」というメッセージが示されている。イラストには非常に多様な人々が描かれており、語彙の選択では、man や woman などを極力避け、a grown up with a penis などの表現が使われている。

本書を研究対象にする理由は、オンライン書店 Amazon.co.jp では ST と TT で相反するような読者レビューが見られるからである。2023 年5月 29 日時点では、ST への 34 レビュー中、5つ星のうち3つが3件、1つが1件と読者受容は比較的好意的である。それに対し、TT への 17 レビューでは、5つ星のうち1つが7件、2つが2件(但し、1件は破損について)である。TT への批判的なレビューには、女性は産む機械ではない、といった趣旨の強い表現も複数ある。なお、書き込みのない評価では、ST は5つ星のうち 4.7(319 件)、TT は 4.1(63 件)であった。

この読者受容の差がどこから生まれたのかを、ST と TT の比較分析により探っていきたい。具体的には、ST で扱うトピックや言語的特徴と TT の訳出の方法などのテクストの比較分析に加え、性や性教育に対するイギリスと日本の認識や制度などについても考察していきたい。

【参考文献】

Greener, Rachel & Clare Owen (illustration) (2021) Making a Baby: An Inclusive Guide to How Every Family Begins. London: Penguin Random House.

浅井春夫(2020)『包括的性教育』大月出版

レイチェル・グリーナー、クレア・オーウェン(絵)、艮香織・浦野匡子(訳)(2021)『ようこそ！ あかちゃん:せかいじゅうの家族のはじまりのおはなし』大月書店

第2日(9 月 3 日) C **会場**(C303) 10:40 – 11:10

C-7 **司会**: **齊藤美野**

文化翻訳としての「重訳」の再考:絵本作家「長谷川義史」の翻訳作品

尹惠貞(一橋大学)

2021 年 9 月の学会大会で「「重訳」の再考――韓国絵本『あめだま』の考察を通して」という題目で発表をした。『あめだま』は韓国絵本で、絵本作家である長谷川義史が翻訳をした作品である。韓国/朝鮮語で書かれた原文を、大阪方言で翻訳している(尹, 2021)。

今回の発表では、作品一つのみに焦点を当てるのではない。絵本作家である長谷川義史が翻訳家として関わった作品は、大きく 2 種類に分類することができる。主に今まで発表者が研究してきた(尹, 2018, 2019)ペク・ヒナの作品群(ブロンズ新社)と、これから分析・考察するジョン・クラッセンの作品群(クレヨンハウス)である。両作品群を比較分析する。

長谷川は、ペクの作品を翻訳するにあたり、「韓国語ができない」ということを述べており、その点、日本語の直訳文をもらい翻訳していることは分かっている(長谷川本人に確認)。ここで、この翻訳が「重訳」なのか「翻訳」なのか、はたまた今までの翻訳概念では説明できない「翻訳の拡充」(佐藤, 2021, 2022)によって説明するのかは、即断できない。他方、クラッセンの作品は英語の作品であり、どのような翻訳過程を辿っているのか。長谷川にインタビュー(6 月 17 日を予定)を行い、ペクの作品群とクラッセンの作品群を比較する。絵本個々の分析もさることながら、「長谷川義史」の翻訳作品における重訳と翻訳の異同について、まずは明らかにしたい。

【参考文献】

佐藤美希(2021)「文学作品の「翻案」と「翻訳」を再考する」『札幌大学研究紀要』第 1 号、pp. 71-96.
佐藤美希(2022)「2000 年代以降の文学の〈翻訳〉概念」『札幌大学研究紀要』第 3 号、pp. 125-153.
尹惠貞(2018)「韓国絵本『天女銭湯』の日本語訳に見られる方言翻訳の問題」『通訳翻訳研究への招待』19、pp. 127-144.
— (2019)「韓国絵本『天女かあさん』の日本語訳に見られる方言翻訳の問題」『通訳翻訳研究への招待』20、pp. 79-96.
— (2021)「그림책 『알사탕』 의 문화번역의 표상」『한국기독교문화연구』 pp. 137-162.
Dollerup, Cay. 2000. 'Relay' and 'support' translations. In Chesterman, Andrew & Natividad Gallardo San Salvador & Yves Gambier (eds.). *Translation in context. Selected contributions from the EST Congress, Granada 1998.* Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins. 17-26.
Dollerup, Cay. 2003. Translation for Reading Aloud. *Meta, XLⅧ, 1-2*, 81-103.
Dollerup, Cay. 2014. Relay in Translation. *St. Kliminent Ohridski University Press.* 21-32.

第2日(9 **月** 3 **日**) C **会場**(C303) 11:20 – 11:50

C-8 **司会**: **齊藤美野**

魯迅日本留学期における翻訳規範の形成:計量的考証をもとに

陳 暁淇(関西大学 D)

本研究は、魯迅日本留学期(1902－1909)における「誠」という翻訳規範の形成過程を計量的に再考したものである。

1909 年『域外小説集』「略例」にて提起した「情に任せての削除・変更は、即ち誠にあらず」(任情删易, 即为不诚)は、魯迅の原文尊重翻訳規範「誠」の発祥とみなされている。原典の内容を完全に翻訳するという内容的等価を意味する「誠」の出現は、魯迅が中国清末翻訳界の抄訳の風潮から脱したことを示す(王, 1999, p174;陳, 2002, p193)。陳(2022)は、『域外小説集』所収魯迅の訳文「四日」の底本について考察し、「四日」は日本語訳本に基づき翻訳した可能性を提起した。陳(2023)は、魯迅の日本留学期間中における翻訳作品全般に対して初歩的な考証を行い、日本翻訳界の影響を受けて誕生した魯迅の「誠」の翻訳意識が漸進的に明確化されていると指摘した。

本研究は、先行研究によって指摘された魯迅日本留学期の翻訳作品における「誠」の規範が適用される作品「哀塵」(1903)、「造人術」(1905)、および「四日」(1909)を研究材料とし、個々の単語の訳出方法に注目して分析を行い、「誠」という内容的等価の変化を計量的に考察した。具体的には、形態素解析器を利用して日本語原典と中国語訳文における名詞を選別した上、単語アライメントツールを利用し両者を対応させた。人手により誤りを修正し、出力結果を「対応ペア」と「不対応ペア」に分け、「対応ペア」が各段落に占める割合を算出した上で、「内容的等価度」の変化を考察した。

先行研究によって指摘された思想面における魯迅の「誠」の意識は徐々に明確化する一方、本研究の分析結果では、日本語訳本に対する「誠」を意味する「内容的等価度」は徐々に減少傾向にあることが明らかになった。このような現象は、魯迅が翻訳活動において徐々に主体性を発揮し始めたことを意味し、魯迅の内容的等価「誠」の翻訳規範は、重訳底本である日本語訳文には適用されないものであると意味する。

【参考文献】

王宏志(1999)『重釋“信達雅”二十世紀的翻譯研究』:193。
陳福康(2002)『中國譯學理論史稿』:174。
陳曉淇(2022)「魯迅『四日』転訳底本考」『或問』第 42 号、123-133
陳曉淇(2023)「何以至“誠”——魯迅《域外小説集》翻譯觀形成考」『亜洲与世界』第六輯

第2日(9 月 3 日) C **会場**(C303) 13:45 – 14:15

C-9 **司会**: **藤濤文子**

中国における“通事”の役割考察:長崎唐通事との比較から

平塚 ゆかり(北京語言大学・順天堂大学)

古来より、中国において通訳を行う人間の呼称には、“象胥”、“舌人”など、さまざまな呼称が使われてきた。なかでも“通事”という呼称は『周礼』にも表記があり、明代の書籍である『西洋番国志』(1434)にもその記述がみられ、通訳者を指す名称として近代に至るまでこの名称が最も多く使われている(李・陳, 2007)。また明朝の行政法を主に記した法典である《明会典》には大通事、小通事という名称も見られ、のちに朝廷が大通事を廃し、小通事を通事に改めたとの記述がある(馬,1999)。大通事、小通事という名称は、江戸時代、長崎で活躍した唐通事の役職にも使われている。

通事の果たした役割を概観すると、長崎唐通事の業務日誌である『唐通事会所日録』によれば、通訳や翻訳の業務以外にも貿易交渉人や貿易業務執行者、外交交渉、現地の唐人の秩序維持管理など多岐にわたっていたことが記されている。

一方、日本の江戸時代と同時期にあたる明朝(1368-1644)末期から清朝(1616-1912)時代に、中国大陸においても“通事”と呼ばれる通訳者が各地で活躍していた。その役割は長崎唐通事と同様、多岐に渡り、通訳翻訳以外の役割も果たしていたことが明・清朝時代の文献に記述されている。

発表者はこれまで、日中通訳者における通訳規範の形成要因を研究してきた。現在文科省基盤研究(C)の研究課題として、「日中通訳史研究-通訳者の役割および規範意識形成の歴史的考察」という研究課題に取り組んでおり、本発表はその研究成果の一部として、中国の古代から近代における“通事”に焦点を当て、その名称の由来と身分、言語習得の背景、それぞれの通事が果たした役割に言及し、長崎唐通事の役割との相違点を探る。各通事の誕生の背景、どのような人物が通事を担当したのか、そして語学習得までの背景、通事の立ち位置など、中国における通訳関連文献を収集し、検証した結果の一部を報告する。

【参考文献】

馬祖毅(1999)『中国翻訳史』湖北教育出版社.
黎難秋(2002)『中国口訳史』青島出版社.
李圧西・陳偉民(2007)『中国近代通事』学苑出版社.

第2日(9 月 3 日) C **会場**(C303) 14:25 – 14:55

C-10 **司会**: **藤濤文子**

歴史文書における厚い翻訳:占領期「都道府県軍政部月例活動報告書」の事例

澤田晶子(神戸市外国語大学 M)

本研究の目的は、占領軍都道府県軍政部が作成した「月例活動報告書(Monthly Activities Report)」の翻訳テクストを収集したうえで、特に訳注に着目して、歴史文書の後世における翻訳(「歴史文書翻訳」)の特質を考察する足がかりとするものである。

外国が関わる日本の歴史事象を考察する上で、日本側資料のみならず、相手国側が作成した資料を解析する必要性は大きく、外国語で書かれた文書を和訳するという手段がしばしば用いられる。Pym(2014, p. 48)は過去に執筆された起点テクストと後世の翻訳テクストでは、テクストの「機能」が異なる可能性があり、脚注を加えるなどの対処が必要だと指摘する。

第二次世界大戦終戦後の占領期、1946 年 7 月から 1949 年末にかけて各都道府県に設置された占領軍都道府県軍政部は、毎月「月例活動報告書」を作成し、上位機関である米国陸軍第八軍司令部に送付した(阿部, 1982, pp. 2-3;橋谷, 1994, p. 50)。これまで複数道府県の「月例活動報告書」が様々な目的で翻訳されている。

本発表では、まずは収集した「月例活動報告書」の和訳テクストを分類し、傾向を考察する。テクストは以下の 3 種類に分類できる。1)訳文を主体とする書籍、または数十ページを訳文に割く書籍。県史編纂事業の一環として出版された書籍や、県史の付録として訳文を収録しているものが含まれる。2)書籍の中の数ページにわたって訳文が掲載されているもの。県史等の占領期を記述した章に挿入される傾向がある。3)学術論文の論拠として引用する際に 1～数センテンスを和訳したもの。分野は教育を筆頭に、児童福祉や公衆衛生など多岐に渡る。次に、まとまった分量の訳文が掲載されている 1)と 2)のうち、訳注があるものについてその内容や挿入方法について分析する。

「月例活動報告書」の和訳に詳しい訳注があることで、報告書に取り上げられた事項の背景が鮮明になり、訳文の資料価値が高まる。Appiah(1993/2000, p.427)が「厚い翻訳(thick translation)」と称した「注釈(annotation)とそれに付随する解説(gloss)を付けて、豊かな文化的・言語的文脈にテクストを位置付けることを目指す」「学術的な」翻訳は、歴史文書の翻訳において有効であると考える。

【参考文献】

Appiah, K. A. (1993/2000). Thick translation. In L. Venuti (Ed.) *The translation studies reader* (pp. 417-429) Routledge.

Pym, A. (2014). *Exploring translation theories, second edition*. Routledge.

阿部彰 (1982)「対日占領における地方軍政—地方軍政部教育担当活課を中心として」『教育学研究』49(2), pp. 151-163.

橋谷弘 (1994)「GHQ 文書にみる占領末期の静岡県」『静岡県史研究』10, pp. 49-65.

第2日（9 月 3 日） **ポスター発表会場**（C402） 11:50 – 13:35

P-1

PAC 分析に基づいた通訳学習者の通訳実践に対する不安要因研究

脇田彩代（北京語言大学 M）

2022 年 9 月、日中国交正常化は 50 周年の節目を迎えた。国交正常化以降、日本と中国の両国は、外交政治、経済、社会、文化などのあらゆる面で交流を深めてきた。そして、通訳翻訳者は両国間を外交政治、経済、社会、文化など様々な領域で繋ぐ重要な存在であり、大きく変化する国際社会の中で、未来を担う通訳者の育成は重要な任務である。しかしながら、通訳学習の過程に焦点を当てた研究というのは日中間においてまだ比較的少ない現状がある。

本研究は、通訳学習者の観点から通訳実践における不安に焦点を当て研究を行った。具体的には、PAC 分析を中心として、さらに、補足的に因子分析を行い、通訳学習者が通訳実践に感じる不安やその要因についての研究を行った。PAC 分析は 4 人を対象に行い、研究の結果、個人を焦点に当てた研究にも関わらず、通訳実践に対する漠然とした不安などのほか、音源を聞くことへの不安、訳文産出に関する不安、通訳素材の難易度への不安など、実験対象者の結果に共通点が見られた。また時間の経過に応じて、通訳不安の内容に変化があり、その原因になる要素には因果関係が生じることが示された。同時に、ネガティブ感情以外にも、興奮や好奇心などポジティブな感情が生まれることもあることが分かった。そして、自身の中の通訳に対する不安を見つめ直すことで、どのように克服・解決するかを考える良いきっかけになることも分かった。因子分析の結果からも PAC 分析と共通する内容が見られたが、不安原因の因果関係や不安を見つめ直すことのメリットなどは PAC 分析結果のみから見られ、不安に関して踏み込んだ分析を行うことの重要性が示された。そして D・ジルの努力モデル（Effort Model）を用いて、研究結果の不安と努力モデルを照らし合わせて分析を行い、どのように不安を減少させる可能性があるかを探った。

本研究によって、これまでの研究ではあまり行われてこなかった通訳不安の具体的な要因を明らかにし、また、通訳不安を個人が認識することで通訳のパフォーマンスが改善できる可能性が示された。本研究が通訳を学ぶ、そして教える人たちにとって通訳能力の向上および通訳教育発展の助けになれれば幸いである。

第2日（9 月 3 日） **ポスター発表会場**（C402） 11:50 – 13:35

P-2

Average Token Delay: 同時通訳の遅延評価尺度

加納 保昌（奈良先端科学技術大学院大学 D）、須藤 克仁（奈良先端科学技術大学院大学）、中村 哲（奈良先端科学技術大学院大学）

同時通訳では、通訳者が発言を聞いてから訳出を開始するまでの時間(Ear-Voice-Span)をできるだけ短くしつつ、元の意味を崩さず通訳することが重要である。自動翻訳の領域においても、近年自動同時通訳の研究が進められてきた。自動同時通訳の研究を加速させていくには、新しい通訳モデルを作り、それを評価し、改善するというサイクルを高速に回していかなければならない。しかし、新しいモデルを作るたびにその評価を人間がすると、大きなコストがかかる。そこで、評価の自動化が必要となる。

自動翻訳による訳の質を測るのには、BLEU (Papineni et al. 2002)という尺度が使われてきた。これは、テストデータの原言語文を翻訳した際に、出力訳の単語がどのくらい参照訳に含まれているかという視点から、出力訳と参照訳の一致度を算出する。同時通訳の遅延を測る尺度としては、Average Lagging (AL; Ma et al. 2019)が近年よく使われている。これは、出力訳の単語それぞれを出力するまでに、どれだけの時間待ったかを元に、遅延を算出する。AL は、Ear-Voice-Span に似ており、原言語文をチャンクに区切って通訳する際にチャンクごとの遅延を考慮した遅延尺度となっている。しかし、AL は出力訳の長さを遅延計算の際に十分に考慮しない。それによって、本来ならば、あるチャンクの訳が長くなった際に次のチャンクの通訳開始タイミングが遅れるはずであるが、その遅れを無視してしまう。それどころか、計算式の都合上、チャンクの出力訳の長さが長くなるほど遅延が小さく評価されてしまい、場合によってはマイナスの遅延値を出してしまうという欠陥がある。

そこで、我々は、出力長によって発生する遅延も考慮するAverage Token Delay (ATD; Kano et al. 2023)という尺度を提案している。これもチャンクごとの遅延を考慮できる尺度であり、原言語文の各単語とそれに対応する出力訳の単語の時間差を求め、それらの平均をとることで計算される。我々はシミュレーションと実験によって、ATD は、AL が考慮できなかった出力訳の長さによる遅延を考慮した遅延評価ができることを確かめた。

【参考文献】

Kano, Y., Sudoh, K., and Nakamura, S. (2023). “Average Token Delay: A Latency Metric for Simultaneous Translation.”.

Ma, M., Huang, L., Xiong, H., Zheng, R., Liu, K., Zheng, B., Zhang, C., He, Z., Liu, H., Li, X., Wu, H., and Wang, H. (2019). “STACL: Simultaneous Translation with Implicit Anticipation and Controllable Latency using Prefix-to-Prefix Framework.” In Proceedings of the 57th Annual Meeting of the Association for Computational Linguistics, pp. 3025–3036, Florence, Italy. Association for Computational Linguistics.

Papineni, K., Roukos, S., Ward, T., and Zhu, W.-J. (2002). “Bleu: A Method for Automatic Evaluation of Machine Translation.” In Proceedings of the 40th Annual Meeting of the Association for Computational Linguistics, pp. 311–318, Philadelphia, Pennsylvania, USA. Association for Computational Linguistics.

第2日（9 月 3 日） **ポスター発表会場**（C402） 11:50 – 13:35

P-3

文学翻訳における AI の活用：多言語比較による翻訳再現の探求

NGUYEN Thanh Tam（神戸大学）

現代のグローバル化した世界において、正確で繊細な文学翻訳の需要は急速に増加している。文学翻訳は、文化的な理解と言語の繊細さを要する複雑な作業である。最近、人工知能（AI）と自然言語処理（NLP）の進歩により、これらの技術を活用して文学作品の翻訳プロセスを向上させる可能性が生まれるだろう。本研究は、AI を活用して文学作品の翻訳の再現を行う可能性に焦点を当て、多言語での「重訳」すなわち「三視点対照の翻訳法」（1）によって、目標テクスト（TT）はより客観的で中立的に翻訳され、偏りによる誤訳・訳漏れを修正する効果を検討したい。人間の翻訳者が直面する困難について、まず言語の複雑さと豊かさには、正確な翻訳を実現するための困難が伴う。さらに、文化的なニュアンスや個別の解釈の選択肢が複雑さを増している。そこで、AI は翻訳プロセスを向上させるために変革的な役割を果たすことができる。また、AI の最もの強みの一つは、膨大な言語データを分析できる能力と言える。強力な機械学習アルゴリズムを活用することによって、AI は文学的テクストとその翻訳のコーパスを分析し、言語間のパターン、バリエーションを比較分析することができる。それ故、人間の翻訳者と AI システムの両方に貴重な洞察がもたらされ、お互いの強みを活かした共同作業が可能であると考えられる。AI を活用した翻訳モデルは、仮想アシスタントとして機能し、適切な文言の提案や適切な翻訳の提案を行う。また、機械学習を通じて、これらのモデルは人間の翻訳者からのフィードバックや修正に基づいて、提案を改善することができ、翻訳プロセスの効率と正確性を向上させるだろう。さらに、AI が複数の言語での多重翻訳を比較する能力は、文学作品のより忠実な翻訳の創造に新たな可能性を開くことを事例で検証する。AI による同じ起点テクストに対する様々な TT を産出し分析することで、言語の選択肢における共通点、相違点、ニュアンスを特定できることが考えられる。この包括的な理解に基づいて、翻訳者は著者の意図を保持しつつ、特定の文化的および言語的ニュアンスに合わせた翻訳を作成することが実現できる。ただし、AI 支援の文学翻訳に関連する潜在的な課題についても検討することが重要である。AI への広範な依存が翻訳の均質化をもたらし、言語の豊かさと多様性を損なうリスクがある。また、言語の多様性と翻訳プロセスの芸術性を保持するためには、AI 支援と人間の専門知識のバランスを保つことが欠かせない。

【参考文献】

NGUYEN Thanh Tam (2016) Indirect Translation Proposed as a Tool of Triangular Intercultural Communication: The Case of Japanese Literature in Vietnam, *Translation und interkulturelle Kommunikation / Translation and Intercultural Communication,* Frank & Timme, Germany pp.129-148

【注】

（1）原文・媒介翻訳・重訳という三視点の関係を指す翻訳法である。